



道



求

第九號

第五卷

求道第五卷第九號目次

求道

◎如來を信ぜずば人生何事も成る事なし

◎他力信仰の淵源

一 佛敎と念佛(下)

感謝

◎曠原の觀想◎小米國◎野外の感謝◎悉信施

◎梁川師を憶ふ

講話

◎人生の根本義

近角常觀

告白

◎絶大なる佛力

武藤金吉

◎安心問題に苦みて信仰に至る

笠木輔一

歎咏

◎秋となりぬ(長詩)

甲之

◎心のうごき(短歌)

左千夫

◎秋風雜吟(俳句)

在米配哉

時報

◎北海道傳道

毎日曜午前九時

求道學舍

(本郷森川町一番地)

毎土曜午後二時

第一 求道會

(九段坂佛敎俱樂部)

毎月二日午後七時

第二 求道會

(日本橋堀蝸殼町説敎所)

求道

第五卷
第九號

如來を信ぜずしては人生何事も成るものなし

人生根本のよりどころは佛である。其佛を信ぜざるものは所謂根本義が見えて居らぬのである。根本義が見えずしては人生何事を成しても成就する筈がない。政治にせよ、實業にせよ、法律にせよ、教育にせよ、感化にせよ、如何なる高尚なる事業にしても、如何なる緻密なる研究の結果でも、如何なる修養の工夫も、若しこの人生根本のよりどころたる佛を信ぜずしては、龍を畫きて晴を點せざる様なものである。是れ聖德太子が十七憲法に篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗なり、何れの世何れの人か是法を貴ぶに非らんと宣ひたる所以である。之を聖德太子が常に講じたまひたる勝鬘經に照し合はせて見るに、三寶歸依の結極は如來に歸依するに在りて、第一義に歸依するは是れ如來に歸依する也、是れ究竟の歸依であると説ひてある。親鸞

聖人が聖德太子の指導によりて誓願一佛乘を見出して、人生唯、盡十方無碍光如來の恵みを信樂したまひたるも實に此一點である。

動もすれば宗教家の或者是奇矯の言を放つて殊更に國家と衝突し、倫理を無視するが如き態度をとりて、宗教と世間道と相容れざるかの如き疑懼を抱かしむるが如きは、固より取らざる所である。此の如きは未だ、絶對の光を認めずして、宗教を以て他の人生百般の事物と對立して考ふるよりして來るもので、相對的の立場に立て居るからである。宗教はもつと偉大なものである、他の人生百般の事物と對立するにあらずして、其よりどころとなるべきもので立場が絶對である。宗教は人生百般の施設と衝突するが如き狹隘のものでない。去りながら其よりどころを認め得ざる人生百般の施設は、必ず危きものである、破壊さるべきものである、根本義より見るときは虚偽のものである、顛倒のものである。聖德太子が世間虚假、惟佛是真と言はれたが、洵に剴切に此眼晴を攫みて示されたる、萬古不磨の遺訓である。親鸞聖人が煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみをまことにあはしますと申されたと符節を合せたるが如くである。

世諦眞諦の關係の問題は此點で明らかである。若し世道にして未だ眞諦の信仰に達せざるものならば、虚假の世道である。其虚假の世道の中に唯一の眞實を認めて來たのが佛である。即ち眞諦の第一義である。若し其眞實を認め來りたるならば絶対なものであるゆへに、世間の何物でも皆是を根抵とし、よりどころとする次第である。此に於て眞諦即ち世諦である。同時に世諦其儘が眞諦である。人生唯如來を信ぜよとは此眞諦の信仰に達せよとの事である。其眞諦の信仰に達するときは、自然の結果世道を悉く眞面目たらしむるものである。極端に言へば眞諦と言へばとて、必しも宗教的言語を用ゐて、異を構へることではない。眞實の信仰に入りたならば、政治、實業、法律、教育、感化其事自身が眞面目に行へるが信仰である。必しも宗教的言語を用ゐるが所詮でない。たとひ其言語を用ゐても、其信仰が輝て居らねば、律法的宗教で、世間の虚假と同様である。若し果して眞實の佛を認めたるならば、たとひ世間百般の言語を用ゐても、其眞實をあらはすことが出来る。法華經に俗間の經書、治世の語言、資生の業等皆正治に順ぜんとあるが、此意義である。蓮如上人が新らしき衣の襟をたゞきて南無阿彌陀佛と申され、疊をたゞきて南無阿彌陀佛にもたれたる心地すると仰せられたも、此處であ

る。

信仰問題に於て律法主義と信仰主義との關係が正に此問題である。未だ絶対の信仰を認め得ざる已前の凡ての學問、凡ての經營、凡ての修養、凡ての傳道、凡ての感化、皆生命なき形骸である。維摩居士が目連迦葉を初め諸弟子諸菩薩を難詰して閉口せしめたも、畢竟第一義を認めざる彼等の說法及行法を排したるものである。即ち各其一能に長して其伎倆を巧にするも、眞諦の信仰に達せざる所謂律法主義である。夫を碎いたのである。

法然聖人が彌陀如來の選擇本願を説きたまひて、布施持戒忍辱精進禪定智慧菩提心六念持經持咒起立塔像飯食沙門及び孝養父母奉事師長等の種々の行を選び捨て、唯専ら念佛稱名を選び取りたまひしことを斷言せられたるも、畢竟同意である。若し普通の意味より言へば、戒は佛陀の遺誡、法身の惠命である。苟も佛弟子たるもの忽にすべからざる筈である。菩提心は佛道修行の出立點である。菩提心なくして道を求むることが出来る筈はない。拇尾の明慧上人が『選擇集』を惡魔の作の如く心得て『摧邪輪』を書いたまひたるも普通の立場から言へば無理ならぬことである。而して法然聖人及親鸞聖人が當時の佛教徒及び世間より迫害されて流刑に處せられたま

ひたも此點である。念佛を主張すればとて、決して奇異のことではない。唯法然聖人の特徴は專修念佛である。所謂捨閉關拋の文字を用ゐて、當時の佛教たる聖道門、難行道、自力、諸善の律法主義を餘地なく根本的に排したる點である。かくありてこそ絶対如來の本願か一世に顯現し來りたる次第である。即ち當時徒らに形體を存して生命の蟬脱せる布施持戒等の佛教が破れて、生命の充實せる選擇本願、即ち人世に南無阿彌陀佛の大慈父の救済があらはれ來りたるのである。此慈父あらはれ來りて、我等は永劫此親に背きて迷へる罪惡の子たることを自覺し、初めて如來光明の懷に攝取せられて眞の佛子たることを得るに至りたのである。『歎異鈔』に、聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくはくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおほしたちける本願のかたじけなさと御述懐さふらひしことを(乃至)さればかたじけなくも我御身にひきがけて、われらが身の罪惡のふかきことをもじらず、如來の御恩のたかきことをもじらずしてまよへるをまよひしらせんがためにてさふらひけりとあるか、實に如來を認め得たる眞諦第一義の極致である。此處で我等はよくく我等自身の價値を、自覺せねばなら

ぬ。我等は實に罪惡の塊である。我等自己の力を以て教育するとか、感化するとかいふ様なることが出来る筈はない。人間は其性分によりて智慧、貧富、明暗の區別はある。併何れにして同様の人間同士である、高下の區別はあるとして足地上を離れざる仲間である。畢竟五十歩百歩である。其一人か他を自由にすることは出来るべき筈もなく、又其様な資格もない。若し我等個人に其様な價値があるもの、様に思ふならば、夫こそ我身知らずの人である。若しも人が我身しらずに、かく自分の力で、かく大それたことが出来るもの、様に考へて其様なことを企てたらは、夫こそ必ず敗るべき運命を有して居るのである。如來を信ぜずしては人生何事も成ることなしといふは此譯である。我等は如來を認め、我等か價値を認め、此如來の力によりてこそ初めて教育をなすべく、感化もなすべからざる。若し人か手先さや、伎功を以て民を感化したり、人を教化せんと企てたならば、必ず成就せざることは所謂沙上に築かれたる城壁の如き運命を有して居る。故に我等は自己の價値を認め、如來の恩徳を認め、人にも此恩徳をも知らせ、共に此德澤の下に平和なる人生を送るために、政治、實業、法律、教育、感化の事に従ふこととなるべきは、必ず何事にも成らざることはない。即ち如來の恩徳を

感謝して、粉骨揮身して飽まで人と共に此恩徳に浴する様にあれがしとの信念より、あらはれ出づるすべての世諦は皆眞諦の第一義に叶ふてある。此處に至りて自己の力にては一步も行ふこと出来ぬ。布施持戒等も律法的でなく信仰より自然に實行出来る様になる。否佛力によりて行はしめらるゝのである。勝鬘經に攝受正法即六度の行といふたは此味である。即ち他人に正法を知らしむるにつきて、布施を以て成熟すべきものには施を以て成熟し、乃至、身の支節を捨て將に彼の意を護りて而も之を成熟し、彼成熟する衆生正法を建立する。之を布施といふ(乃至)忍辱を以て成熟すべきものは、若し衆生、罵詈、毀辱、誹謗、悉怖することあるも、無恚心、饒益心、第一忍力乃至顔色不變とを以て彼の意を護りて、而も之を成熟し、彼の成熟する所の衆生正法を建立する、之を忍辱といふ、これらは皆信仰より流れ出づる六度である。一たび信仰に入りて佛恩を感謝するが故に、之を人に知らすためには身を捨てることも出来る。一たび信仰に入ればたとひ人が罵詈、毀辱するとも、五分五分となりて之を争ふことは出来ぬ様になる。たとひ之を蒙るとも、我も信仰に入らざる前は此の如くであつたではないかと思ひかへすときは、不知不識の間に忍辱が出来て、遂に他人を同じ信仰に入れるやうにある。かく

他方信仰の淵源 (承前)

一 佛教と念佛

下

偕て上に於て、佛陀の如何なる方であるか、又佛教とは如何なる教であるか、大略も話しする事が出来たと思ひますかの『起信論』中に眞如といふ事が書いてある。此の眞如といふは何ういふ事かといふに、佛の眞實常住の境界、即ち今申した佛陀の自覺せられた境界を言はれたものであります。夫であるから、佛陀を離れて眞如を説くと、譯の解らぬ事になつて仕舞ふのである。今日普通の考にては眞如とは世界の本體也と考へて居る、併佛の境界を離れて是を言ふことは大なる誤である若し世界宇宙といふ側より言つてみれば、眞如は佛より見たる世界の眞實の智慧であると言ふ事は出来るかも知れぬ。が今日世間普通に言ふが如く、唯理論的に本體と考へては、自覺の問題としては、毫も力の無い事になつて仕舞ふのであります。『起信論』にて言へば、無明の滅した處が眞如である。即ち我々の無明煩惱が悉皆消滅し盡した處で、茲に廓然として現れ出づる積極的大平安の境である。決して今日の學者が言ふ如き、事物の本體などいふ冷かなるもので無

信仰より出づる六度がある。其通り法然聖人の言はれた律法主義の菩提心は排するが、淨土の大菩提があれば、あらゆる行が皆報謝の行となりて、信仰の力を以て行することが出来る。此處に至りて人生何事にも成就せざることはない、自ら顛倒しようと思ふても顛倒することは出来ぬのである。かく如來を信じ來りて其上に立ちて仕事をすれば、人生百般の世諦、即ち政治、實業、法律、教育、感化、皆盤石の上に築かれたるが如く、永久不變萬世不朽の成効を告ぐることは、一點の疑ふべき餘地を存せぬのである。是全く如來無限大悲の恩徳である。

攝受正法廣大義者、即是無量、得一切佛法攝受八萬四千法門(乃至)攝受正法、出生大乘、無量界藏、一切菩薩神通力、一切世間安隱快樂、一切世間如意自在、及出世間安樂

勝鬘經

いのである。然るに其眞如の境界も何時しか我々の無明煩惱の爲に蔽はれて仕舞ふた。御存知の如く『起信論』には、本覺、始覺、不覺の文字が用ゐられてあります。此の本覺といふは、即ち今の無明に蔽はれざる天真明朗の佛陀の境界即眞如である。然るに我々は何時迷ひ初めけん、忽然として無明の爲に蔽はれて仕舞うた。之が不覺である。之を覺りて目の醒めた時が、即ち始覺であります。斯くの如く佛陀を離れて眞如を説く事は出来ぬのである。『起信論』には能く水波の譬が有つて、水と波とは本來別物では無けれども、無明の風の爲めに波だつて來たと言つてある。處が今日の人は之をも世界説明に持つて來て、世界の本體は眞如である。夫が風の爲に亂されて茲に世界なる現象が現はれた坏と言つて居る。我々は今自覺の問題として讀む。肝心の心の問題として解釋する。既に名からして大乘『起信論』といふのである。即ち大乘たる佛陀の境界に信を起させる論である。即ち『起信論』の「心」といふは、未だ煩惱の風に亂されざる心の事、此の上の一點曇りなく現はれたる佛の智慧が本覺である。然るに何時の間にか無明の風に吹き荒されて、茲に色々の惱みや怒の心が起さる。其處で流轉門である。處が今度は氣が附いて此無明を滅して始めの本覺にかへりゆく。之が還滅門である。而し

て其の無明が滅し盡して、最後に大光明が現はれ来るのが始覺であります。斯の如く古來理屈一方に解釋し來つた『起信論』も、自覺の上より見る時は、矢張り内心の經驗から書かれたものであつた。否佛教は何の方面から言つても、自覺を離れて佛教は無いのであります。先きに申した十二因縁は、丁度小乗佛教の模範的説明になるが、今此の『起信論』は大乗佛教の模範的説明と申してよいのであります。

茲で一寸前に戻りますが、佛陀の説法に苦集滅道の四諦の法門といふのがあつた。之は何うかといふに、初めに申した如く、無明が原因となつて生老病死が顯はれる、夫がもとになつて人生の種々の苦惱が来るのであると説く、即十二因縁の順觀が苦諦である。而して其の苦の原因は十二因縁を逆上りて最初の無明にあると説く即十二因縁の逆觀が集諦である。其の苦を脱する爲めには、根本の無明を滅しなくてはならぬ無明滅すれば、即ち涅槃の眞實境が開顯し來るのである。之が滅諦である。而して其の無明を滅する爲めには、眞實の一佛道を修行する外は無即八正道が道諦であります。即ち四諦の法門といふも佛が十二因縁の實驗を人に教ゆる爲に、取られた處の形式である。

其處で已上申した處を簡單に一言する時は、佛とは生老病

死の人生を解脱せられたる覺者である。其の順序は生老病死を根本の無明に衝きとめて、其の無明を滅ぼして自覺の光を見られたのである。其の佛自身の實驗を人に教ゆる時、人生迷妄の根本は無明であるから、其の無明を滅却せよと教えられた。之が小乗佛教である。而して其の無明の無くなつた佛境界が自覺である。自覺は一心の上になる。一心の上に其自覺の光即眞如を見た時が始覺である。其の始覺に至る迄の迷ひの有様が不覺である。我々が不覺を覺りて始覺に行く事の出來るのは、本來本覺なる眞實常住の境界即眞如が有るからである、といふ事になります。

已上は廣大なる佛教全體の上から、其の骨目を拾つて申したのであるが、ことに注意すべきは、彼の涅槃に對する考であります。涅槃(Nirvāṇa)は即ち滅の義であるが、此の滅は、人生の無明の苦惱迷妄が滅するといふ意味である。人生の無明の迷妄が滅する故、茲に眞實の光が現はれて來るのである。其光が即ち眞如である。

猶ほ序に大小乗の問題につき一言すると、斯の如く佛教を自覺の問題として見る時は、今日世人の考へて居る哲學的に乘を分類する見方は、凡て皆な間違ひである。今日の人大小乗は小乗といへば世界の一切事物は皆な假の物である。「引き寄

結べば柴の庵なり、解くればもとの野原なりけり」て、世界の一切事物は滅亡すれば本來の無に歸ると説くものであると思つて居る。又大乗と言へば眞如といふ一元の上に立てた哲學的説明のやうに思つて居る。そうすると西洋哲學と能く調和すると思つて居る。佛教は哲學では無い。哲學は信仰を説明すべく後より起りたるものである。故に大小乗の問題の如きも其根本たる信仰の自覺問題で見ねばならぬ「引き寄せて

結べば假の庵なり解くればもとの野原なりけり」といふは、我々は今現に苦惱の人生と考へて居るが、一念目が覺めれば生死無明の迷妄は消滅して、唯廣大なる平和の境界が有る計りであるといふ實驗的の味はひを言つたものである。併雲が晴れば自から月影が現はれる。人生の無明の雲霧が消滅すれば、光の現はれ来るは自然である。此月影が眞如である。此の實驗自覺といふ事は、大乘小乗といはず、佛教本來の精神であります。爾るに其佛教が後になつて、實際の上に大小乗と分れて來た。其の分かれた源は何であるか、是か頗る肝要な問題である。勿論後には大乘小乗の間に哲學的相違を生ずるに至つたことは確であるが、初めから哲學的相違より分派したものでない、之は段々に申す事として、兎に角哲學は

印度に付き物であると言つてもよい位である。が佛教の始め

に於ては、毫も哲學的意味の加はつて居無かつた事は確かである。之は今日一般の哲學的見解が間違つて居る事を申したのであります。

扱て今言ふ如く、佛教は實際に於て大小乗と分れて來た。何故一佛説が斯く二途に分れて來たものであるか。今日大小乗を哲學的差異に見て居るのは、因より根本的の誤解であるが、夫ならば如何なる具合で、斯く二途に分れて來たものであるか。之は頗る緊要の問題であります。

抑佛教の前後を通じて、常に忘れてならぬ處の一問題がある。夫は律法主義と解脱主義といはうか、此の二大傾向が常に佛教を一貫して付き纏うて居る事である。

上來度々繰返すが如く、佛教は釋尊の解脱實驗に初まるのであるが、釋尊は其の前に僧徒派の哲學や、婆羅門教の律法的苦行によつて安心の道を求められたのである。けれども此等のものは遂に安心を與ふる事がなかつた。是に於てか此等の化石沈滞せる哲學的律法的教法を斥けて、降魔成道の實驗により内心の光を以て、涅槃の妙境に至られたのが釋尊である。夫であるから釋尊は先づ第一に外道の律法主義を排して、解脱の眞味を人生に顯現し給ひたるものである。

扱て釋尊は其の解脱涅槃の味はひを人に説かれるに、其の

廣大なる妙境界を見付けてみると、人生は苦しみもの、空のもの、無常のもの、無我のものである。所謂苦空無常無我の人生であると示された。之は釋尊が自から人生の一切の快樂を捨て、涅槃絕對の境界に行き、成程今迄楽しいと思つて居つた人生は眞に苦の世界であつた、無常の世界であつた、空の世界であつた、無我の世界であつたと、涅槃實驗の味はひより言はれたものである。夫であるから、釋尊が苦空無常無我と言はれた半面には、常樂我淨の涅槃の積極的大光明が溢れて居たのである。言ひ換ふれば、常樂我淨の光明こそ眞に頼むに可きものであるが、人生を當てにして居てはいかぬと言はれたのである。之は實驗上非常に味はひのある事、人生が眞に苦であると解かるのは、一方に大なる光明が認められたからである。未だ光明が認められぬ間は、如何に苦しみつゝも眞に人生を捨てる事は出来ぬ。初めに申した私の經驗で申せば、世の中に眞に自分に同情する者は無いと解かつたのは、一方に廣大なる佛の大慈悲が解つたからである。爾に一方に光明を認むる事なくして、唯人生は苦である、無常であると無理に押し付け置く者がある。夫は即ち律法的に陥つた者で、眞實の味はひは少しも無い。今日の所謂罪惡觀無常觀の多くは皆な之である。唯世の中が苦しい、自分は罪が

深いと足掻き悶ゆるのみであつて、眞に人生を捨て光明を見出し人生を解脱したる處は見えぬのである。けれども一念目が醒めて、眞に此世は當てにならぬものである。唯頼むべき眞實佛の恵みのみと、一方に永久常住の光が見えて来る時は、此世が無常といふ事も苦空無我といふ事も中心から眞に解かつて来るのである。

さて斯くの如き味で、釋尊が苦空無常無我と仰せられた半面には、常樂我淨の大光明が輝いて居つたのである。も一つ言へば、苦空無常無我といふ事と、常樂我淨といふ事は涅槃の一體兩面であると言つてよいのである。處が其當時の人間は、此人生が常樂我淨であると考へて居た。之は所謂凡夫の四顛倒である。其處で釋尊の此の御教化を聞いて、此の常樂我淨の人生をば、苦空無常無我であると考へなくてはならぬものと律法的に解した。大聖釋尊は決して斯くは仰せられなかつたのであるが、釋尊の心中に輝ける大光明が見え無かつた處から、遂に斯くは律法的に考へて佛の精神と異りたる一佛教の出来上つたのである。之が即ち小乗教である。其處で、當時の印度外道の律法主義を破つて、人生は苦空無常無我である、此人生を捨てた處に眞實の光明があると覺られたが、釋尊の解脱主義であるが、今度は又其釋尊の教を律法的に考へ

て、茲に小乗教が出来たのである、釋尊は決して小乗を説かざる筈は無い。小乗は此方の見解の間違つた處から生じたのである。夫であるから佛の眞説の『阿含經』杯を見ると、慥かに自覺の教として生きてある。處が夫をば今の如く唯律法的に考へた爲め、小乗教に於ては眞の光は皆な消えて仕舞うた。其處で其の眞の光を説く爲に起つたのが大乘教である。大乘教の眞如は即ち其の佛の眞の光りを説いたものである。大乘教に於ては、涅槃は決して消極的のものでなく、眞如の廣大なる境界であると言つて居る。其處で解脱主義律法主義といふ上から言へば、小乗佛教の律法主義を捨て、眞實の解脱實驗の上に立つものが大乘佛教である。原始佛教の律法主義に落ちたものが、小乗佛教で、其の眞髓たる眞如常住の光を説いたものが大乘佛教であるといふ事になります。

其處で彌々今日の標題たる佛教と念佛の關係になります。之も矢張り同様の味はひであります。抑今申すが如く佛陀が自覺實驗の眞味たる涅槃の廣大なる味を説くのが、本來佛教の精神である。夫であるから、我々も若し眞に釋尊が成された如く、無明を滅し、光を見る事が出来るなれば、無論眞實の解脱に違はぬのである。去りながら茲で、我々も佛のなされた如く爲さねばならぬとなると、即ち先きに小乗佛教が

陥つたとおなじ律法的に陥る事となる。處が我々も佛のせられた如く家を捨てねばならぬ、欲を棄ねばならぬ、といふは即ち大經釋尊の通られた道を辿る者で有つて、之れ即ち聖道門である。夫であるから表面より言ふ時は、聖道門の教は大聖釋尊の實驗を辿る者であつて、此の外に佛教の有る可き筈は無い。併しながら、大聖釋尊の通ほられた道を、我々も是非辿らなければならぬとなると、茲に何うしても律法的に陥る。茲に於てか、恰も原始教が此方の取り方一つで、律法的小乗教に陥つた如く、佛の實驗を追ふ處の聖道門も、遂に律法的自力宗に陥つた。其處で何うしても一方に解脱實驗の教が起つて、佛教の眞味を發揮し來らねばならぬ。茲に於て起つたのが淨土門他力宗である。茲は實驗上非常に味ひの存する點であります。

聖道門淨土門は、或は自力、他力、又は難行道易行道とも言ひます。難行道易行道と言はれたのは、龍樹菩薩であつて、自力他力といふは曇鸞大師から始まつたのである。又聖道門淨土門といふ名は、道綽大師が始めて用ゐられたのである。其處で聖道門淨土門と分かれたもとは、今言ふ如く律法主義と解脱主義——解脱主義といふよりは或は信仰主義と言ふ方がよいかも知れぬが、兎に角此の二主義の差別である。

處が茲に誰しも怪訝に堪えぬのは、小乗大乘といひ、聖道門淨土門といひ、同一佛陀の教えから、如何にも面目の異つた二宗派が出たものである、といふ點である。之は如何にも違ひが極端であるから、何人も疑はざるを得ぬ。が其極端たる所が大に意味のある點である。全體大小乗の問題を考へるに現今二種の見解がある、其一は大乘非佛説では歴史問題より眺めて實驗的の考が加はりて居らぬ、隨て大小乗を哲學的に根本的に異ると見て、大乘非佛説を唱ふるのである、他の一は小乗より漸次發達して大乘を出さんとするのである、此考にては恰も山の芋が變じて鰻となつた様に、小乗から大乘を出さんとす、即阿含經の中に眞如の言葉を見出して漸次の變遷を説かんとするのである。併此考によれば大小乗の變化があまり又極端すぎるのである、即此極端なる點が兎に角要點である。前説は其相違が極端なる爲に矛盾するものとして非佛説を唱へ後説は調和を説くも其變化の極端たる點が説明出來ぬ。然るに此自覺問題より説明して律法主義解脱主義より見るときは極端より極端に變化するのが當然である。初にも申すが如く、佛陀の教は千古同一である。唯聽く人々の心から、遂に斯の如き大なる違ひを生ずるに至つたのである。大聖釋尊は決して斯く、せねばならぬと、律法的に仰せられたのでは無い。例

三七日の間思惟せられた時に、二人の商人が有つて、佛の御許に參じ、佛に南無したてまつる、法に南無し奉ると言つたとあります。之は此時はまだ僧が出來て居無つたから、唯佛と法とに歸命した丈で、僧に南無し奉ると言はなかつたのであるが、其後佛が鹿野園に於て、彼の五比丘の爲めに説法せらるゝに及んで僧を生じた。其處で南無佛、南無法、南無僧の三寶歸命が出來上つたのである。其處で注意すべきは、この歸命の意義である。若し佛弟子達が、佛陀の實驗せられた如く自分も實驗せねばならぬと努めるならば、歸命の意義も甚だ慕無いものであるが、さうでは無い、佛弟子達が佛の膝下に跪かれた時、今眼前に覺の境に入られた佛がまします、此佛の教が絶対に有り難いといふ處から、自から發して言葉となつたものが此の歸命の言である。言ひ換ふれば佛の教を絶対に信ずる處から發した言である。も一つ言へば此時既に絶対歸命の他力信仰が現はれ居るのであります。又斯く頂いてこそ、眞に佛陀の御意を戴いたものと言ふべきであると思はれる。之は實驗上の味ひでありますか、子供が親に對する場合にしても、親の命であるから従はねばならぬと考へて居る間は、また眞に親の意を得たものと言へぬ。其の如く、佛陀の教を聽くにしても、佛の仰せてあるから其の通り思は

せば佛教の戒律である。佛教の戒律と言へば今日では誰しも、純律法的のものと思つて居る。處が、佛教の初に於ては決して斯くの如き律法的の意味では無かつた。即ち佛陀が覺に入つて、佛弟子達に過失缺點のある毎に、一々親切に訓戒を垂れ給ひたものが戒律である。夫であるから、戒律は佛陀の大慈より出でたる道徳的訓戒であつて決して今日いふ如き律法的形式道徳では無かつた。従つて佛弟子が之を實行するにしても、佛陀が斯く言はれたから爲てはならぬといふ考からて無しに、眞に、そうしてはいけないと知つて仕なかつたものである。處が後になつて、漸々佛陀を遠さかると共に、佛陀の禁戒であるから、そいふ事を仕てはならぬ、といふ事になつて、遂に佛陀の活ける戒律も、茲に律法的形式道徳となり、眞の光は又見る可らざるに至つたのである。

抑々淨土宗他力念佛の淵源を遡ると、佛教に三寶歸命といふ事があります。此の三寶歸命といふは何うかといふに、佛陀が人生より解脱實驗して佛陀となられた時に、多くの弟子達が佛の御許に參して教を聽かれた。此の時に佛の教團に入る儀式から三寶歸命である。三寶歸命とは、申す迄もなく佛法僧の三寶に歸命する事である。歸命といふは、梵語に於ては南無である。佛傳による時は、佛陀か樹下石上に於て

ねばならぬ、其通り行はねばならぬと聽く間は、是れ律的形式にちちたもので、佛の眞意を去る事遠いのである。處が一念斯く教へ給はる佛の手許に氣が付いて見ると、現に正覺成就の佛まし／＼と、我が爲に斯く説き給ひつゝあるのである。其の廣大なる佛の御哀みに氣が付いて見ると、現に此の佛のまします事の有り難やと、何人と雖も南無佛ならざるを得ぬのである。之に於てか一切の教法を行ふにしても、自から努めて行ふてなしに、唯佛の仰せのまに／＼樂んで行ふ事になる。之ぞ眞に佛陀の眞意を得たものではあるまいか。是れ實に原始佛教に於ける三寶歸命の眞意であります。而して翻つて思ふに、今日絶対他力信仰に於ける南無阿彌陀佛と、此の三寶歸命の南無佛と、畢竟同一である。言ふ迄もなく、南無佛法僧の三寶は結局南無佛の一寶に收まるのであります。親慈聖人が化身土卷に涅槃經及般舟三昧經を引きて歸三寶を擧げ、是を以て佛教の眞髓としたまひた。これ即ち眞宗である。

扱て斯く言ふ時は、然らば大聖釋尊が念佛して成道せられたと言ふ事があるかと反問する人があるかも知れぬ。けれど、きも之は固より佛陀の境界であつて、我々凡夫とし思慮すべき限りて無いが、『阿彌陀經』の中には「我、五濁惡世に於て、

此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に、此の難信の法を説く」とある。之によつて伺ふ時は、佛陀が最後の解脱安心も、失張り念佛の「法によりて得給ひたるものと推し奉る事が出来る。去りながら我々の問題は、佛陀か人生より解脱して、正覺を成じ給ひし點にある。佛陀が佛陀として人生に顯現し給ひし點にある。即ち佛陀か現はれたまひたる已上は其佛陀に歸するが南無佛である。其佛陀は彌陀の本願南無阿彌陀佛より顯現したまひしものなれど、既に佛陀か佛陀としてあらはれたまひしが人生南無佛の生ずる所以である。かく佛陀は是れ既に人界を超絶し給へる絶對界の佛陀である。眞如界に逍遙し給へる佛陀である。唯佛與佛の知見あるのみである。其佛に歸命するのが南無佛であります。又我々にしても此點は大に注意せねばならぬと思ひます。抑々彼の自力聖道の人達が、形式的律法に陥つた所以も外ではない。釋尊一代の諸種の教説、諸種の戒行、是れ皆な解脱涅槃の境界より説かれたるものである。夫であるから眞に之を實行するには、何うしても涅槃の妙境よりせざれば能はぬのである。處が彼の人達は此の點に於て大なる取違えを爲たからである。之を言ひ換へると、若し佛陀の光明無くんば、人間は永久に律法主義するより脱する能はぬのである。然るに

慧の塊なり、と氣附きたる時、立處に佛陀の大悲に融合せらるゝを得たのである。此の一念の心が即ち南無佛であります。念佛であります、南無阿彌陀佛であります。

之を要するに、聖道門淨土門の別れ目は、律法主義と解脱信仰主義との差異に始まるのである。而して聖道門は、大聖釋尊の實驗の跡を追はんとするものなればまことに貴き教である。決して輕蔑すべき謂はれは無いが、律法主義の悲しさには實行する事が出来ぬ。是れ難行道の名ある所以である。茲に於てか、信仰主義の見地に立ちて、佛教の本意を開顯したるものが、淨土門他力易行の念佛であります。明日は念佛と信仰と云ふ項の下に、殊に日本に於ける念佛の變遷に就きお話する積であります。

さやかたも心の月はみゆべきを晴れぬや胸のけぶりなるらん

くるずゝのたまゝえたる人の身に致ふる程の功德ともがな

こゝをしもさとの星と思ひしは迷にくだるはじめなりけり

我等其佛陀の境界に達する能はざるものが、如何にして佛陀の境界に達するを得るか。即如何にして律法主義より脱かれ得るか、是實に成道したまひた佛陀の光明の力である。即人世に安んずるを得るは一に佛陀の光明があるからである。佛陀は實に人間の律法を破り給ふ光明である、力である、恵みである、と申す事が出来る。此佛陀に信賴する所か即南無佛である。南無阿彌陀佛である。

最後に一言附け加へて置き度いのは、眞如の佛境界である。眞如の佛境界は初めにも申した如く、一方に常樂我淨の絶大なる大境界を認むると同時に人生を苦空無常無我なりと解脱した境界である。即ち人生を苦なりと捨て去ると同時に、一面に絶對なる大樂境の開け來りたる光景である。人生を迷ひなりと知ると同時に、片方に眞の智慧の塊として現はれ給ひたる有様である。人生を無常なりと覺ると共に、新たに慈悲の塊として現はれ給ひし境界である。而して佛陀が一度此の絶對眞如界に入り給ふや、衆生の苦惱の有様を見て、ぢつとして居る譯には行かぬ。茲に於てか大聖釋尊は、成佛し給ふや否や、國中に法を傳へ給ひたのである。而も我々衆生は、久しく佛陀の眞意に背き、唯徒らに佛の言の如くにせねばならぬと律法主義に苦しんだのであるが、最後に佛は慈悲の塊なり、智

感 謝

曠 原 の 觀 想

北海道の曠原、秋草咲き出て、黄紫亂れ交ふるの状、人をして覺えず、七寶莊嚴の淨土を觀想せしむ。乃ち善導大師の觀經疏を繙きて、坐ろに無漏清淨の妙土を偲ひ奉る。殊に一望悉く天然の深林にして、殆んど太古の昔に遊ぶの感あるに至りてや、未だ人間あらざる世界猶叢林棘刺の穢土たるを想像するに難からず。是を思ひ、彼を考へ、我等が無始己來の罪惡の深重なるを懺悔し、亦無倦大悲の光明世界に満ちたまへるを感謝すること限りなし。忽にして漫々たる大洋に臨み、水天一碧乾坤纖塵なき光景に至りては、眞個に琉璃地の映徹せるもの、水想觀の實況を自擊すべく、忽にして一望の田園茫茫として邊畔を見ず、地平線上唯稻波の動く處、太陽西に傾きて、狀鼓を懸くるが如く、夕陽大空を照耀するの有様は宛然として日想觀に住するが如し。嗚呼、何れにつけても思出多き北海道の曠原なる哉。

小米國

北海道は日本の米國也。其風物、人情亦米國的也。到る處の深林老木盡々たる所悉く火を放つて道を通するが如き、一望の田園皆悉く新開拓地たるが如き、皆以て坐ろに米國新世界の光景を想はしむるものあり。加之市街廣濶にして、區劃井然たる、人家宏壯にして規模の大なる、亦米國市街の面影を存するものあり。而して人情亦潤達にして踴躍せざる、競争劇甚にして奮闘を事とする亦米國に似たり。從て宗教思想亦頗る淡澹にして、内地の如く深刻なる實驗に接するの機會頗る少し。然れども數年を経たらんには、其奮闘生活の結果人生問題のために煩悶するもの、却て亦一層酷なるものあらん。此に於てや如來の慈光に接するもの多からんことを期して待つべき也。小樽はシカゴの如く、札幌は費府の如く、而して函館は紐育の如し、小樽は大阪の如く今正に奮闘劇甚の中に在りて、人皆無意識の間に救済を求むるの心地也。函館は今既に人生の悲劇を實驗し意識して、信仰問題を自覺する恰も東京の如く、札幌は既に業に北海道に於ける宗教の中心として、寧ろ信仰問題夫自身の爲に腐心せること京都の如しと謂ふべきか。要するに全道舉りて數年の後、人生苦痛の結果信

仰の熾んなる期して待つべき也。北海道に於ける信仰問題の前途其れ多望なる哉、嗚呼。

野外の感謝

北海道の市街此の如く新世界にして米國風たるに拘はらず、村落に到りては氣風頗る古くして、恰も北國地方に傳道するの感あり。而して其移住者の多くは、加能越の國人多きを以て其當に然る所以を悟れり。夫れ北海道に於て諸種の事業を計畫するの米國人に多からん。然れども、農夫として深林を啓き、山野を開拓して遂に此の如き美はしき田園を實現したる人は、却て北國地方其他の農民の力也。而して彼等は幼年の時より宗教を以て養はれ、信仰を生命とす。故に一郷を開拓するや、必ず高壯なる殿堂を作り、寺院を經營して以て彼等が永久の住所と爲す。其間に於て如何に信仰が彼等の生命たるかを徴すべき也。此に於て無言にして力行せる彼等農夫の功績の偉大なるを感謝せず人はあらず。我嘗て宗教史を讀みて、伊太利に於ける修道院の初にありて、ベネチクト派あり。勞働を以て主義とし、一方には山野を耕しつゝ祈禱に身を委ねたりと。吾人は如何に彼等が實行的たるかに驚き、後來起り來る修道院各派が、何れも實行を主とし、社會

ば、徒らに如來の福田に衣食して、未だ衆生の心田を開拓せず、佛教の教田を耕耘せず、啻に大悲の慈親に對して申譯なきのみならず、彼等質撲なる御同朋に對して、何の面目あらん。石狩の原野田園百里、黃熟の秋に對して覺えず、感謝の涙を注ぐ。南無阿彌陀佛。

悉信施

郊野に對しては聖人配所の昔を憶ひ、自ら顧みれば日夜白毫の恩賜に浴す。而して今や正に馬齡三十九、恰も聖人勅免の時也。感謝述懐の情禁じ難く、恰も五年ぶりの瓦作あり。

- 正是聖人勅免時 洪恩未報歲華移。
- 東西馳聘皆冥護 日夜食衣悉信施。
- 一代法藏尙不盡 半生宿願果何期。
- 濁中賴有寶珠在 樂彼佛天復奚當。

梁川師を憶ふ

秋風北海の原野を吹きて、遊子懷舊の情を催す。忽ち雁信あり。曰く九月十四日は正にこれ綱島梁川師の一周忌也、知人、門人、墓を修め、以て追悼の誠を捧げんとすと。而して

救済に身を抛つ。決して偶然ならざるを感じたりき。然るに豈圖らんや、之を遠き外國に求めず、古き歴史に訴らず現に吾人眼前に於て、此活ける實證に接せんとは。彼等は一方には來相を採りて耕しつゝ、一方には如來の大悲を感謝して、毫も不足を感じる所なく、亦其功を誇る氣色だもなし。今世の青年動もすれば勞働の神聖を唱へ、田園生活の貴ぶべきを説く。彼等は之を實行して、而して之を口にせず、以て如何に彼等の信念の偉大なるかに驚かすんばならず。聖人雪を衾とし、石を枕と爲し、却て如來恩德の深廣なるを嘆して曰く、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとはぼしめしたちける本願のかたじけなさと。嗚呼親鸞一人がためなりけりとは、此等の御同朋が一身を北海の邊陲に没して、終生役業以て自ら安んずる所以にあらずや。如來大悲の恩德は身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩德も、ほねをくだきても謝すべし。嗚呼これ此等信者の精神に非ずや、此等勞働の源泉にあらずや。嗚呼此の如くにして、彼等は此の如き美田を開拓せり、此の如き天然の莊嚴を現出せり。眞個にこれ、彼等質撲なる農民の手を透して顯現せる如來大悲の辛勞に非ずや。而して吾人自ら顧みれ

予に囑するに其墓石に題せんことを以てせらる。予恐懼措く所を知らず、電報にて辭し且つ意見を通す。而して需めらるゝこと先の如し。故人の高潔なる一生、清きこと玉の如く、不徳子の如きもの敢て其囑に應ずるは身の分を知らざるのみならず、却て世の嘲を受くる正に當然也。然れども、時日正に切迫して寸時も緩ふすべからず、特に遺族諸氏固く執りて聴かず、進退頗る窮す。乃ち以爲らく、これ故人の尊命のみ、如來の靈勅のみ、故人が常に親鸞聖人を追慕して反覆愛誦措かさりし和讃結文

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、

まことのこゝろなりけるを、

善惡の字しりかほは、

おほそらことのかたちなり。

是非しらず邪正もわかぬ、

この身なり、

小慈小悲もなければども、

名利に人師をこのむなり。

こそ、實に我身上の懺悔なりけり。かくの如き境遇よからんもあし、からんも我身として計ふべからず、慚愧唯芳命に委したてまつるの外なし。法然聖人の所謂唯命旨を顧みて不敏を

顧みず、是乃ち無慚無愧の甚しき也。親鸞聖人の所謂唯佛恩の深重なるを念ふて、人倫の嘲を耻ぢざるもの也。乃ち一夜

肅々として自ら戒め、唱名念佛故人を追懐して筆を揮ふ。未だ意に満つるものなし。曉起一筆忽ち成る。偶々大經師嵐林松氏來訪せらる。氏は故人の書及び予の書を受讀せらるゝ御同朋也。其恰當なるを贊せらる。乃ち禮拜して以て之を郵送す。所懐に曰く

信門勇士字梁川。

杳々登遐既忘年。

法悦春風靡一世。

回光夕照盡三千。

聖靈感得通先覺。

愚衲慕來慶宿緣。

深夜唱名瀝心血。

淋漓題石墨痕鮮。



講話

人生の根本義

(求道學會日曜講話)

近角常觀

此度は随分長々と旅行をしてゐました故、話をはじめめる前にまづお土産として、傳道中の概略をお話し致してみませう。まあ北海道は御承知のとほり、新しく開墾した處なれば、廣々とした平原もあり林もあり、其内に少しつゝ田地が耕されてあつて、森林などの木は立ちながらに焼かれて、だん／＼開墾されてる有様、丁度亞米利加の小規模の様なものにみえます。そこにすんでる人達も、定めし新智識のある人々であらうと思ふていたところ、さうでなくして極く古い思想をもつてゐる人が多い。到る處多くいつてゐるのは加、能、越、三州の人々であつて、中には低波村など、いふて、越中の村名そのままを用ゐ、其國の言葉をつかふて居るものもある。とにかくこれらの人々が、自分で移住當時は殆んど泥田の如き土地を開き、樹木を截りつゝ開墾したのであるから非常に貴い地である。寺の如きも随分大きいのが多く出來て、僧侶なども自ら土地を開いて非常に苦心してやつたものらしく、いたるところ人々色黒く、一生の苦勞のあと歴々としてみゆるものがある。それらの人々は、たゞ勞働して自身辛苦をなめてやつてきたのゆゑ、甚だ其家其畑みなおもしろくおもしろくはれる。家の如

き移住してとりあえずたてた爲か、皆あまり立派な大きいものはないが、寺だけは随分大きくてある。それについて、私は妙なことをおもいだした。それは昔西洋で羅馬の方へはいつた宗教は慈善事業だの、勞働だのといふて、自ら行ふ方面に發達してかのベネジクト、オルデンなどの如きも勞働しつゝ信仰するのを最も神聖なものとしてゐる。その事をおもひいだし非常におもしろくおもふた。北海道は函館より岩見澤鐵道の分岐點まで行き、粟澤といふ極さ／＼やかな村までも傳道さしていたゞきました。札幌にてはかの雜誌に於ても告白のてゝある齋藤たいさんも喜びむかへて下され、數年來私のくるのをまつて居られた青年諸君にもお目にかかり、信仰を説いて非常にありがたい事でした。旭川には私に遇いたがつて、くるのを切にのぞまれて居られた青年が、私のくる七日前に病氣の爲に死なれたといふ事もあり、残念なことでした。函館にては東西兩本願寺の修養會、青年會、求道會等にて演説しました。て此度の旅行は丁度 皇太子殿下の御通りあそばす處々をとおほりて、到る處お迎へをいたすと、いふ有様で實にありがたい事でした。北海道をすませて、青森へまわりました時の如き私のとまりました蓮心寺は、二度も 天皇陛下の行在所にあつたらた家て其次の間にとめていたゞき非常に感佩の至りでありました。次に弘前、能代、秋田、土崎、大曲、新庄、山形に於ても長い間まつて居たとて、多くの人が尋ねて下され、此學會出身の諸君にも面會してうれしい事でありました。次に若松に於ても皆様が熱心に道を求めてこられました。其時フト氣づいてみましたら此日は九月十七日、私の丁度十年前信仰に入つた日である。丁度其事をはなして居てフト

念の日である事に氣づき、身もこゝろもちぢみあがる程ありがたく感じさせていたゞきました、氣がついてみれば此様によろこぶけれども、如來様は十年間一時も私の上を忘れたまはず、たえずめぐんでいて下さる、實にありがたい事である。かゝる如くして、殆んど前後八十日間、一日の休みなくやつて、或時は身體綿の如くくたびれてしまふけれども、又御信心の事をよろこばせていたゞくと勇氣百倍して御慈悲をよろこび説く事でありませう。

さて永々と旅の話をしましたが今日の題は人生の根本義といふのであります。此前の社説には人生たゞ如來を信ぜよといふことをかきました、これは丁度北海道行道函館の宿でかいたもので、人生のことがいろ／＼氣にかゝると同様、私なども宗教の過去をもち現在を憂へて、將來どうか自分のちもふ様にしたいなど、いろ／＼おもふことがあります。けれども人生此如來あり、たゞ此如來を信ぜよ、何事も自分ではかゝるではない。丁度親に子がいろ／＼あゝもしたい、こゝもしたいとねがうやうなもの、親はちやんと與ふべきはあたへ、與ふべからざるは與へぬ様よき程に苦心して居て下さる、さればたゞ此親の御はからひにまかせて、自分としてかれこれ不満足を起さぬ、たゞ此如來を信ぜよといふ事をかきました。そこで此度の社説にはも一つすゝんで、人生此親を信ぜざれば何事もなる事なしといふことをかきました。實にさうである、人生如何なる事といへども眞實義に手が届いて居らぬ間は、何事といへども成しとげることとは出来ぬあの人はいや手である、人格が高くある、行ひのよい人である、よく心得た人であるといへども、此御信心に氣のついて居らぬ間はすべ

何以直枉。

とあります。即ち三寶——今日講話の始めに稱へました三歸依、佛と法と僧に歸依するも一つに縮めていへば佛を信ずる一つであります。此佛を信ずる事によりて始めて第一章の相和らぐ事が出来るのである。勝鬘經に

常住歸依者謂如來應等正覺也、法者即是說一乘道僧者是三乘衆也此二歸依、非究竟歸依、名少分歸依、何以故、說一乘道法、能得究竟法身於上更無說一乘法事云云。つまり僧や法に歸依するばかりでは、究竟した眞の歸依でなるといふて次に

若有衆生、如來調伏、歸依如來、得法律澤生信樂、心歸依、法僧、是二歸依、非此二歸依、是歸依、如來、歸依、第一義者、歸依、如來。

とあつて、如來にすくはれて信樂を獲得させていたゞいた上には、三歸依はみな一つの如來に歸する事になるのである。親鸞聖人が磯長聖徳太子の告命をうけられた時も、日域大乘相應地とあつた。後に即ち法然上人にまゐりて、たゞ南無阿彌陀佛の一つをよろこび信じ奉る他はないときかれた時に、これこそ告命の大乗の第一義乘也とよろこばれたのである。されば行卷に勝鬘經を用ひて

大乘者即佛乘、是故三乘、即一乘、得二乘者、得阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提者、即是涅槃、涅槃者、即是如來、法身云云

とあつて、勝鬘經に其最後に如來無二、限齊、大悲、亦無限齊、安慰世間とある。是全く聖人の宣ふ無碍光如來である。こゝで此三寶に歸命するのは、南無阿彌陀佛一つに歸依す

てだめである。たゞ信によらずんば決して成し得る事は出来ぬ。それについて此度はいたるところで聖徳太子の十七憲法のはなしをしましたか、其第一章にも其事がかいてある。委しくは何れ時をみていひませうが先づ其文に

以和爲貴、無忤爲宗、人皆有黨、亦少達者、是以或不順君父、作違隣里、然上和下睦、諾於論事、則事理自通、何事不成、

とある、實に此通りである。聖徳太子は決してこうせよ、あせよといふてはない、こうすればおのづからこうるぞ、和をもつてせねばおのづから其事は成らないぞと、自然の道理にもとづいてかいてある。如來を信ぜねばおのづから何事も成し得なくなるので、如來によればおのづからよき様になるのである。太子が此事をいはれたも私は深き御苦勞をなめたまひし實験よりかゝられた事とおもひます。すなはち、守屋だの馬子だの爲に、いろ／＼と、ふかい御修養をつませられたる事と、恐れながら推し奉る次第である、以和爲貴、實にさうである、此和といふ事が小は一家庭より大は國際上にまで、やがては世界の大平和のものである。この和さへ出来れば何事もない。しかし我々はどうしてもうまく和して行く事が出来ぬ、たとひ形は人に充分にゆづり、人に親切をつくしてやつて行けても、内心どうしても相和ぐ事が出来ぬ。内心和ぐ事が出来ぬは眞の和でない故、それでどうして圓滿に行かうぞ、行くものでない。我々はどうしたら内心和する事が出来る、それは直ちに太子が次にかくいはれてある。

篤敬三寶、三寶者佛法僧也、則四生之終歸萬國之極宗也、何世何人非貴是法、人鮮尤惡、能教從之、其不歸三寶

ることになる。此歸命するといふことは、いつもど／＼しくいふことであるが、如來の招換の勅命である。如來はたゞ此南無阿彌陀佛一つを撰擇して、これを我等にあたへたまうた。そして其餘を悉く抛ちたまふた。即ち布施の行も忍辱も智慧、禪定、精進持戒みな捨てて、此名號一つを以て我等を救ふて下さる。こゝが實に肝要のことであつて皆様もとりまぢがへてはならぬ。若しもそれならばもう他の行はどうでもいゝのである、我等はそんなことをせずともいゝのであると、横着になつては大間違である。實に布施の行といひ、忍辱といひ我等佛弟子のなすべきことである。若し持戒なども守らねば丁度親の遺言を守らぬも同然、言語同斷のことである。しかし到底私共には眞實の智慧も布施も出来ないのである。其様な下根下劣の凡夫なればこそ、如來はよくしるしめして、たゞ名號の一つを撰擇して私共に下された次第である。故に皆さんは、如來を仰ぐに私共の何も出来ぬ淺ましき者であるといふ事をふかく思はねばならぬ。十七憲法の十條に

絶忿棄瞋、不怒人違、人皆有心、心各有執、彼是則我非、我是則彼非、我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如鑽無端、是以彼人雖瞋、還恐我失、我獨雖得、從衆同舉。

とある。共是凡夫耳といふことが肝心である。先の第一條の和といふことも此御信心によりて我は淺ましい凡夫である、と、眞から頭を下ざりきつた處で眞の和といふも出来るのである。實に此忿を絶つといふことも人の違へるを怒らぬといふことも自分の惡しきものであるとの自覺より怒らぬてすむのである。實にさうです、私なども先年苦悶した時などは、菩提

心さへ起らぬ、自身人を愛することも出来ぬのみか、却つて人を疑ひへだつ、實にどんな悪しき心でも悉く起つた。其如き浅ましき奴を如來様が助けて下されたのなれば、人がどんな事を今せうと、信心に氣のつかぬうちは無理もないこと、むしろ、あたりまへである、私はもつとひどかつたではないかと、怒るところか却つてあはれにもひ、又どうかして其人をも法に入れて安らかにしてやりたいといふ心がわいてくる。されば此信心一つさへいたゞけば人にもよくてき、人の悪しきをも忍びて布施することも出来るのである。

勝鬘經にも皆此信仰一つより布施も忍辱も生きてくるといふことがある。

善男子善女人、應以施成熟者、以施成熟、乃至捨身支節、將護彼意、而成熱之、彼所成熟、衆生建立正法、是名擅波羅蜜。

とある。この成熟といふことは信仰を成就し、圓熟せしむることである。されば其人が信心を得る爲には自分の身の支節をさへ捨てゝもかまはぬ、そして彼人の意をまもつて信仰を成就させ圓熟させてやれば、衆生は正法を建立すべしといふのである。即ち其人が御信心をいたゞく、是が眞の擅波羅蜜といふのである。信仰には萬徳が備はつてある故に、しらす／＼の中に佛様の御力で、どんな事でもさせていたゞけるのである。自分としては少しの力もないけれども、これが信仰の徳であります。又忍辱も

以忍成熟者、若彼衆生罵詈、毀辱、誹謗、恐怖、以無慈悲心、饒無心、第一忍力、乃至顔色無變、將護彼意、而成熱之、彼所成熟、衆生建立正法。

おもふて居られる、信仰といふことは何もむつかしい事ではない、たゞ佛が久遠劫來私をあはれみ救ふて下さる。其限りなき御めぐみに氣づくことである。私が廣島縣竹原へいつた時、頼鷹次郎といふ頼山陽の御子孫の方が苦しみに苦しまれぬいた上に、利井明朗といふ方に、地獄や極樂はあるものかときかれた。其方があるさうぢや、それならみえますか、ときかれたらみえるさうぢや、觀經といふ御經にさうかいてあると仰せられた。それで自分がとても理屈を以て相手にはなれぬと降参した。又後に後生助けたまへとお文にあるが、あれはどういふ意味でありますかといはれたら、それは佛が後生を助けたまふのであるぞ。それをたゞ。へとうければいゝのであるといはれた。そこで其方につく／＼氣がついてみれば、あゝの、このといろ／＼くるしんでいたが、如來様にはもうちやんと

いゝ様にして置いて下されたのである、さればたゞあゝありがたいとよるこへはなんにもないのである、實にありがたい事であつた、とよるこばしていただかれたさうである。皆さんもさうである、決して此方より何のかのと計らふて苦しんだ處でなんにもならぬ、親の慈悲をこうしたらわかるであらうか、あゝしたらわかるであらうかと苦しんだ處でしかたがない、たゞ親の御慈悲あゝありがたいと喜ぶ計りである。此間も若松である青年の方が私はどうしてもありがたいとおもふ事が出来ませんといはれました。て私はおもひきつて手ひどく其方にいふたのであります。ありがたいとおもふのではない、親がいろ／＼私一人の爲に心配して氣をもんで下さる事に氣づけは、たゞありがたいと即今よろこぶ他はないではないか、たゞありがたいのである、といふたら、其人も

いろ／＼どんな事を人がせうと顔色無變で忍耐出来るといふは、やはり佛を信じ奉るより出来るのである。さういへば何か信仰いたゞいた人は大へんをらい様に思へるけれども、決してえらい事はない、共に是凡夫である。浅ましき奴である。それにつきて此間ありがたい事をきいた、それは或人が私に話してくれましたが昔二十四輩の巡禮が或人のうちへとめてくれといふてとめてやつた。處が夜になつてみると巡禮が足を佛様の方へむけてねていた。それで其人はなんとといふあさまい事だ、二十四輩ともなるものが、佛様に足をむけるといふ事はなんたる事であるとおもふた。しかし又考へ直して、あゝ私の昔の姿をみせて下されたとき喜こんだ。それを或人がきいて非常に感心いたし、名高い香樹院師に某はこれ／＼の事をいふて喜こんだ、實にありがたい事であると話した。處香樹院師はさうか私のいたゞき様はそれとはちがふといはれました。どうあなたはあいたゞきなされますかといふと、私は今の姿をみせていたゞいたとよるこぶと仰せられたさうです。實にさうです、私共はいつても足を佛にむけてゐる奴である、實に浅ましきものである、故に前にいふた布施や忍辱等もあししいも浅ましきものとおもひつゝ、頭の下りきつた處で、御報謝としてさしていたゞける次第である。政治にあれ慈善事業にあれ皆同様である。私が悪しきもの、共に凡夫のみといふ信仰なしに、人同志が人を感化し、人を治めて行く事は難事である。かくの如く、此信仰は人生の根本義となるのである。さういふと皆さんのうちで、そんならどふしたら信心をいたゞけるかと苦しみなされるかもしれぬ、恰かも信仰を物でも得る様に

成程と氣づかれ信仰に入られた。

蓮如上人の御文にたとひ八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざるを愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世をしるを智者とすとあります。

故に智慧といひ行といひ、何れも人生の根本義ではない。たゞ此信心を得て萬物始めて生命あり、人生の眞實義に手のつかぬうちは何物も出来ません。

甲申孟冬十六日。奉母過廉塾。與茶山翁唱酬。前詩爲翁。後詩裏作。併錄。 供春風老人咲政。

頼山陽

櫻齋祭亥野童喧。

只祝郷鄰產育繁。

恰有潘郎陪母至。

霜寒黃葉夕陽村。

蟾樹依稀黃葉邨。

轎夫相導到柴門。

某丘某水吾還識。

曾侍此郷揚宮源。

絶大なる佛力

武藤金吉

報佛恩の爲め入信の告白を捧げよと、尊敬する近角師の切實なる仰せに従ひ、其の有りのまゝの吾が感想を、喜んで申述ぶる機会を得たる光榮を深く感謝致す次第であります。

僕は漸く四十の坂を越えればかりの一壯年て、元と赤貧洗ふが如き水呑百姓の兒でありまして、郷里で小學校の全部も卒業することの出来ぬ身分て、十六の時に家を無断で飛出し、随分兩親始め親族の者に多年心配をかけ、時には横濱の埠頭に天秤棒を擔ぎしこともあり、時に學塾の飯炊たりしこともあり、時に辯護士の書生たりしこともあり、時に新聞社の探訪者たりしこともあり、今日只今迄も有ゆる艱難を續け、酸辛を嘗め、剛情で獨立し來り、我慢で獨行し來り、宗教の心掛けもなく、信仰の標識もなく、天下何の處と雖も憚る所なく、所謂眼中權貴もなければ富豪もなくして、何事につけ手引をして貰ふ先輩もなければ、恩人と申す者もないので、働いては衣食し、學びては闘ひ、闘ひては進み、事苟も一度思立ちしとは如何な障害物が前に横らふが、如何なる險山大澤があらふと、如何に獐猛の虎狼が現はれ様が、決して後には引かぬ流て、假令百尺竿頭一步を進めて、火の中でも水の中でも辭さず飛込み、必ず初思を貫徹せねば止まぬ性癖がありて、自ら好

んで多の敵に衝り、自ら好んで厄に投ずるのだ。故に僕は常に極めて多くの敵を有ち、極めて多くの誤解を招く。而して其敵に對して最も酷烈にして、一步をも假す所がない。其亦誤解に對して隻語をも辯ずるを好まない。總て極端から極端に走り、軌道を脱したることも尠からず、殆んど此の身は活きたる非難的であつたのです。現に法律の制裁を受け、是れまで三回の犯罪事件に被告となつて、重禁錮の處刑を受けました。

其第一回が、青森縣で明治二十一年に、時の縣知事鍋島幹氏(現貴族院議員男爵)が、青森縣民は無神經なりと官報に報告した際に、天下の大問題となり、僕は東奥日報といふ同地に於ける新聞の記者であつたから、極力筆誅を加へ抵抗した結果が、官吏侮辱犯となつて二ヶ月。其第二回目が、翌年鍋島縣知事を其官邸に於て煙草盆にて毆打せしが、毀棄器物犯となつて四ヶ月。其第三回目が本年四月巢鴨監獄で四十五日間服役した。家宅侵入罪であつて、所謂肩書に前科三犯と申すのであります。所が悉く政治犯であるから、此の罪を犯しながら其前後に於て悪いと思はなかつたのみならず、三回の犯罪共に全く一片の公憤から、俠氣自ら禁ずる能はず、身を挺して官權に抗し、反對派に對したるものにて、實に家宅侵入罪といふが如きは、馬鹿／＼しき限りである。法律では罰せられたが、寧ろ我は善き事を爲せりと衷心思ふたのである。其處で其大要を申すのは、即ち入信の次第を告白する順序であらふと思ひます。

昨年九月廿五日群馬縣會議員の選舉に、其當選者三十四名中、政友會に屬する者二十二名あつて、役員組織は無論政

友會の勝利であつたのだ。然るに越えて十月十三日役員選舉

の日なるに、反對派は、巨額の金圓、酒、又は藝妓などを以て、其以前八日に誘ひ出し、高崎旅人宿豊田屋、又は前橋の料理店赤城館に政友會派の縣會議員八名を收容し、交通遮斷し、番人を付け、タトへ親族と雖も面會せしめず、白晝門を鎖して、内には酒池肉林といふドンチャン騒をやらかし、縣民を侮辱する底の傍若無人の振舞なるより、責めては政友會員として選舉せられたる八名の縣會議員に、其心得違ひを一度談せんと、即ち十月十二日白晝正午を期し、政友會に屬する代議士四名、縣會議員十四名、其他村長、郡會議員等四五十名、一勢に料理店赤城館に赴き、談判の結果彼等に反省を促し、其の中の五名を復歸せしめ、一旦反對派が違法を以て組織せし議長以下參事會員を取消さしめ、終に縣知事有田義資は辭職するの已を得ざるに及び、更に縣會を開き、吾が政友會の全勝を占め、覆水盆に復らしめたるは僕が總指揮者なりと認められたる所謂赤城館事件なるものにて、之れが家宅侵入なりとて政治の公争を、反對派に屬する須藤、關口二代議士を始め、一派の木槍三四郎氏など申す縣會議員の告訴を受け、僕外七名(何れも郡村會議員にて、地方紳士は前橋監獄に繋かれ、豫審の審問を受け、十五日間にて放釋され、次て前橋地方裁判所公判に付せられ、第一審公判は能く其事理に精通し、公平の判決を下し、其中の二人に有罪を申渡され、僕等六名は無罪となつたのを、立會檢事の控訴する所となり、更に東京控訴院に移され、有罪の宣告、即ち一ヶ月十五日の重禁錮、二ヶ年の刑執行猶豫を受けたのです。本人たる僕等豫期に反しての驚きは當然なるが、恐らくは天下も悉く驚き

たるもの、様に見受けました。

當時帝國議會の開會中にもあり、尙上訴の途なきにもあらず、強て實刑に服せざるもよき筈であるが、熟ら考ふるに、現に數十名の者同一行動を執り、同僚代議士の官部裏、木暮武太夫、佐藤虎次郎氏外縣會議員等が更に之れを問はれず、我國の法律が、單に峻烈なる一片の法理のみに拘泥して、毫も實際を究めず、精妙なる適用を容れざるものとせば、僕亦他を語る必要なく、自ら努めて其身を潔くする爲め、長く之れを争ふの極めて無益なるを信じ、辯護士にも政友にも謀らす、宣告を受けたる公判庭に於て、冤を含んで其刑に服す可きを決したのである。而して直に控訴院に手續を爲して衆議院に登り、此事を先づ同志に告ぐれば、何れも驚き、多く同情の涙を流さくたすのである。實に時は明治四十一年二月廿七日で、僕の永く將來に記憶すべき日て、此日衆議院に於ては、本會議の各日程は上り居りまして、多年選舉區の爲めに苦心せる僕の提出に係る渡良瀬川沿岸特別地價修正法律中改正法律案は、日程第十二に組入れあり、今此の案の通過を謀るべき演説を爲さんか、議員辭任の告別演説を爲す機會を失はんとするの場合に臨み、兩者を満了する頗る難いことになつた。東京控訴院に於て、目出度再び無罪の判決を得て、第廿四會議の棹尾に、得意の雄辯を振はんと、心中私に期したる今日は、今日限り忝くも、三十七八年戦役に於て恩賜の勳位をも擲はれ、衆議院を退かざるを得ざる場合に接し、如何に剛情我慢なる僕も、其實悶々として胸中は強く痛み、猶々として頭腦は全く破んとす。然れども泣く譯にも往かず、涙をこぼすことも出來ず、議院内の各室に散在せる政友同志に

告別し、時間の到るを待てば、午後一時の鈴は鳴りて、開會は宣せられぬ。僕が議院を退く時期は刻々に近けり。今退くの最後に、吾が提出案の爲め、忠實に三十分の演説を遺るに暗涙を飲み、腹の中で泣いて平氣を装ひしは中々に辛らかりし。然るに僕の心中を諒し、前回に自由問題なりし該案を、政友會は黨議を以て、進歩黨も同じく滿場一致を以て可決せられし嬉しさ。次で鐵道特別會計に關し、井上角五郎氏の一時間以上の長演説があり、其了るを俟て、僕は突然議長を呼び、更に發言を求めしに、議長は日程以外の發言はなりませんと宣ふ。僕は議事の進行に關し、意見ありとて重て追求し、終に議長は滿場に議り、異議なく即ち日程以外に於て議事の進行に關し、自己の進退を明かにする爲め、前例になき發言權を得たので、苦しい中の喜びは言はん方なく、先きに吾が提案は美事通過し、さて又告別演説を爲すがだめ、再び演壇に起ちたる時は、氣は逸して天に沖し、全く虚心平氣とも申すべく、自然に自己あるを忘れ、其告別演説は既往四ヶ年間、議會の外に於て爲したる妄慢の罪を謝し、反對黨を咎むることなく、自黨政府の保護の薄きを怨むことなく、男らしく勇壯に、言々句々悉く正直に飾りなく述べ盡して、再び諸君と國事に相見ゆるの日あらむと結論して、衆議院を去りしが、跡にて傍聽筆記録を讀み、彼の告別演説は、其際既に佛天の恵にてありしかと追想して止まざる程で、第一の不可思議とも申すべき次第であります。

斯くして控訴院の宣告を受け、直に衆議院に辭表を差出し、告別演説まで數時間の中に濟ませ歸宅せしにぞ、親友二十餘名は見舞はれて席に在り、驚くこと一方ならず、種々雑談なるとせしに、押送の任に當りし逡巡は、僕に手錠を施さんとせしより、僕は自ら進んで刑に就くもの、手錠の必要なげむ、手錠は懲戒の方法か安樂總監に聴けと申したるに、奥の方より一人の警部出て來り、此の被告人は別に送れと、車にて別の逡巡相乗りにて、同夜東京監獄に押送され、藤澤典獄により、手篤き取扱を受け一泊を致しました。

此の日舊館林藩主秋元子爵は、僕の爲めに縣下選舉區民に左の推選狀を配布され、現に今既決囚として監獄に下るものを、再び選出せよと切實を極めらるに至つて、自身たる僕は、何んとも感泣に堪へなかつたのである。

拜啓、本縣選出代議士武藤金吉君、過般本縣會役員選舉の際奇禍を得られ、續て今回控訴判決に依り服罪の止を得ざるに至れり、當時同氏の執りたる舉動は、或は軌道を逸したる如くなるも、其精神たるや、國家民人の爲めに其身を顧みず、難に向ふも敢て不辭、遂に反對派の乗する所となり、縲紲の辱を受くるに至らしめたるは、轉た同情の至りに不堪儀に候、抑も君が多年衆議院議員として國家の大事に參畫し、我群馬地方公共事業に對して、多大の勤勞を盡されたるは、何人も承知せらるゝ所にして、吾人の常に多とする所に有之、殊に鑛毒問題、治水問題、地價修正問題等に關し、君が主として盡瘁せられたる勤勞は、之れを謝するに辭なしと可申候、要するに君は我が縣選出代議士中に在りて、嶄然頭角を抽んで、國家に誠忠にして、地方民人に親切に、身を公共事業に致して、毫も其私を顧みざる氣概を有するの志士と可申候、然るに一朝此の奇禍を得て、遂に代議士の職を退き、且つ甘んじて囹圄の人たるに至り、

ど爲し笑ひ興せしが、斯うなつて見れば僕自身は早く獄に往きたい様にもあるが、今の今まで國民を代表せし代議士たる此の身が、假令破廉耻罪にあらずと雖も、中心不安の念は起りました。其處を前前の剛情我慢で自ら決し、家内并に男兒(八才六才)二人に、留守中の心得、入獄の始末などを語りしに、家内は元より吾が鼎鑊を甘しとする覺悟を諒し居れば、涙一滴落さず、却て入獄中總選舉に對する準備に忙しかりしかば、愁ひの種も紛れ居りしが、八才の男兒は、「オトウサマは何を悪いことをして監獄に往くのぞ」と皆んながいふと、無邪氣にも別を惜みし際には、不知不識熱涙を濡したのである。「貴様も大きくなつて良い事をして監獄に往け」と返して言ふ吾が心中の苦しさ、彼は變な顔をして涙ぐみ黙してしまふた。此の時に於ける僕の苦痛は、彼の判事の宣告を聴きしより酷かつた。越て三月二日には吾黨同志、杉田議長外百六十餘名の代議士は、僕の爲めに芝の三線亭に送別の宴を開かれ、元田、長谷場、杉田、森本、木暮、佐藤諸氏の熱烈悲愴なる送辭を賜はり、僕之に答へ、未曾有の盛大なる會で、何れも僕の爲めに前途の光明を祝されたのである。尙僕は三、四の兩日、選舉區其他に配布する數千通の書狀を、自ら書生を督勵して差出し、明れば五日にて朝から齋戒沐浴して神佛を拜し、吾が健康を祈り、入獄の時の到るを待ちけるに、檢事局より刑事被告人武藤金吉と書放して、午前中に出頭せよとのことに、日向、木暮、板倉の各代議士、鹽田、赤阪、阿久津、木村等郷里の諸友、外に親族の者數人に送られて、東京控訴院に至り、暫時の別を告げ、逡巡に引立られ、警視廳拘留場に届けられ

我縣選出代議士中の白眉を失ふは、如何にも遺憾の至りに候、尤も君の刑期は四十五日にして、四月十九日は滿期自由の身となられ、當然法律上直に被選舉權を回復して候補者たるを得候に付き、來る五月の衆議院議員總選舉期には、充分の餘裕有之候、就ては諸君に於ても君が過去に於ける多大の勤勞と、今回の奇禍とを想到し、且つ代議士としての人材を擧ぐるに着眼せられ、總選舉に際しては、奮て武藤金吉君を再選せられんことを切望の至りに不堪、此段得貴意候。 頓首

明治四十一年三月五日 子爵 秋元 興朝

僕が獄に下るの際、各新聞社も大に注目されたものと見へ、跡にて其記事を読めば、僕の家庭并に妻兒に關することまで詳に書てあつたが、僕も留守宅に於ても、志士の面目を傷けないのみならず、却て平生反對の新聞まで、異口同音に深き同情を與へられた様である。又退て議院では、僕の進退につき補缺選舉説や、資格論を随分八ヶ間敷出て、花井氏、元田氏等の論戰もあつたソウだが、何につけ、彼につけ、僕の後進にして常に問題となる點は自ら愉快に想ふたのです。 偕て同日より僕の身は何等權利なき囚徒であつて、翌六日東京監獄にて呼出され、藤澤典獄の前に到れば、懇に慰められ、其談話中、會て山田喜之助氏が河野廣中氏立會人として此處に在監中、酒を禁ずる誓をせられ、出獄後二ヶ月間は少しも飲まざりしが、今日にては復た大に飲み、終に折角の名士も酒の爲めに、臺なしに墮落し救ふ可からずと嘆せられ、僕に其酒と煙草の嗜好を問ふ。僕は酒は一垂も飲まぬが、大の喫煙者にて、日々マニラ葉卷十本乃至十五本づゝ用ゐしが、

昨日限り此の不得止飲む能はざる機會を利用し、斷然禁ずる決心なりと答へしに、藤澤典獄は嗜好を禁ずるは中々困難なりとて、煙草の山田喜之助氏たらざる様望まれしか、幸に今日迄禁煙して居ります。

ソレより他の既決囚と乗合馬車にて、巢鴨監獄に到りし時は春尚寒く、身を刺す寒風は雪を飛ばして、頻りに降り荒みた。大なる監獄の門を入り、直に白州に廻はされ、所持品の取調べも済み、吾が暖き軟き衣服は悉くはがれ、赤き薄き獄衣に着替へさせられ、藁鼻緒の木履を與へられ、吾が獄中の名は一千三百七十號と命ぜられ、彌々四十五日の役に服し、身を置くべき監房に幽せられたのである。

僕は初め、又は盤根錯節に會ふて、其利、其鈍始めて知られ、人は艱難辛苦に逢ふて、其愚、其賢始めて判ず、豈窮に悲むの小人に働ふべけんや、ナニ四十五日位の入獄はなんでもない、曾て十八九年前ではあるが、監獄の経験もあるし、無事に此處を出てたる上は反對黨を散々に踏み躪り、吾が勢力を張り、此の縲縛の辱は、公憤と私怨とを永く忘れず仇打ちを執行せねば止まぬと覺悟したのである。

然るに實地監獄に往て見ると、此の以前青森縣で入獄した時と違ひ、第一自己の生活狀況が一變し、衣食住總てが贅澤に流れて居るから、特別に既決囚として取扱はるゝに拘らず、容易でない。先づ吾が身を容れし監房を見廻せば、堅牢なる鐵と石と煉瓦と板の間で、外は一面に霞々たる銀世界、近年の大雪で、鐵窓より吹き込む寒風は肌を裂くが如く酷しく、荒らさ一枚の針の蔭に静座し、時間々々に吾が前に運ばるゝ食膳は、箸を執らんと欲も起らず。嗚呼吾れは如何にして

斯の如き悲慘の境に在るものなりや、定めし郷里の老母は吾が事を愛ひ給ふならん。家に遺せし妻子は如何に泣き居るかとの感想は、二六時中現映して眠らんと欲して得ず、其煩悶苦痛は極に達し、熱涙を下すこと屢々なりし。如何にして此の苦悶を脱し得べきやと、強情我慢の僕も既往を顧み、將來を鑑み、幾度か自失し自棄し、神も佛もなきなりと、他人を恨むの餘り神佛に對してまで敬意を缺き、却て恨むに至りました場合に、豫て教誨師諸君の配慮にて、差入れありし求道雜誌並に近角師著述の『信仰の餘瀝』、『懺悔録』を知らず識らず手にしたのです。讀んで見ると人生の極致を説き、罪惡救済の意義を闡明せしむるに自己の經驗を詳徴し、監獄は好箇の修養場である、監獄は道を求むるに好適の場所であると特筆し、而かも大安慰を得たる事實を列擧して、親切に吾れを導くに至りぬ。讀み去り讀み來りて數日を久しうして感特に深し。遠く二千年前の王舍城に於ける悲劇、韋提希夫人の求哀より阿闍世王の苦悶救済を描き出したるに至りては、現在に實演を見るが如く、内心に苦悶せる吾れに比し、始めて宗教の何物たるを解し、始めて信仰の趣きを味ひましたので、成程佛陀の慈光に攝取されしとは此の事を言ふのかと獨り喜び、獨り合點し、刻一刻前まで總てに不安なりし僕は、光風霽月の如く、胸中一點の曇りもなく、何んとなき言ふに言はれぬ愉快となり、其時迄寒くてたまらぬ薄き獄衣のまゝでも、俄に暖くなつて來たり、又何處から何處まで氷の様な監房も吾が爲めに難有き靈場と思はれて、冷かならず。これ迄腸胃を満足しむる能はざりし三度々々の食物は、山海の珍味天下の美味となり、釋尊が金枝玉葉の御身を以て、食を市に乞ふ

に比せば、尙過分なりと思ふばかりでなく、虚心平氣に自己の往時を顧み、僕か郷里の實家で父母に育てられし境遇は、大して此の監獄と違ふものでない。住居が自由なるこそ違へ、色こそ異れ、着物も獄衣のソレと同様で、麥飯に味噌汁は常である。近頃の贅澤三昧に馴れたから、此の監獄生活も恐ろしい様なもの、父母の膝下に居つた二十餘年前の往時と變らぬのであるから、自覺して何に不足を言ふべきこともなく、近角師外教誨師の講話も數度拜聴し、規定の役業には經木眞田を編み、運動を爲し、佛典を讀み、恰も好し幾多の古聖賢と相語るの如き機會に接し、特に内外古今の列聖が難行苦行の跡を親しく拜し奉り、何れも牢乎たる確信は死も自ら甘んじて、一生涯を貢獻したるは、千古萬古の大鑑として服膺すべく深く肝に感せり。僕は何故に此の佛陀の光被に浴することが出来なつたかと、追回措く能はず、今月迄爲し來り、考へ來りしことが、悉く間違であつて、且つ罪惡であつたことに氣が付いたのです。ソレ僕が巢鴨監獄に入る時の感と、入つてからの想とは、全然相異つて來て、頭腦に一革新があつたとても申しませうか、強情我慢の一點張りて遣り通したる僕は、他力本願の趣味を喜ばして費ふことになつて、近角師より賜りし珠數は監獄内でも、特に携ふることを許されたのです。始め惡き奴だ、憎き仇だと思つて、彼の肉を喰ても飽き足らぬ吾を告訴せし反對黨の木槍三四郎氏等に對し、衷心より感謝の念を拂ふことに相成り、若し彼の人々の告訴するなかりせば、僕は巢鴨監獄にて此の信仰は獲られなかつたらふと思ふのです。矢張り平々凡々たる墮落の人であつたのでしよう。實に此の信仰は期せずして、思はずし

て獲られたので、即ち不可思議佛力とも申すべきか。入監の前日見舞に來て呉れた井上角五郎氏は、僕が今日迄社會に居ち居るは全く信仰の力であると、自己が朝鮮事件已來の事實に徴して諭され、君も此の機會に宗教の道に入り給へと申されしが、監獄に到りても尙其氣にならざりしに、不圖近角師の懺悔録が手引となり、此の難有きことになつたのは、如何にも不可思議の次第です。

四十五日は夢の如く、四月十九日午前〇時には眠込んで居ると、看守が武藤殿放免ですと、吾が名を呼ばれて起され、放免され、出獄するに臨み、僕は生涯敬慕すべき吾が巢鴨監獄を獄衣を禮服に着替へ、禮拜し、感謝して去りぬ。

門を出れば二十餘名の政友は馬車三輛にて迎はれ、自宅に歸り、二百餘名の來客に接し、滞りたる處用を辯じたる上、午後一時の汽車にて郷里に歸り、三千餘名の大歡迎を受け、亡父の展墓を爲し、老母を拜し、それより吾が生れし村の鎮守賀茂神社の廣前に於て、入監中に於ての信仰の告白を爲し次で直に衆議院議員候補者として競争場裏に起たんと宣言を致したのです。此の日は亡父の命日にて、僕が出獄の日と、候補發表の日を兼ねたる大吉日で、引續き二十五日間に涉り、四十三回の演説を試む。其演説は政治の演説と申すより、正直なる信仰の告白でありまして、縣下所の同情を博し、他の候補者は一萬二萬の大金を蒔き散らし、悉く選舉法違犯者を出したる中に、僕は費用も極めて少く、一人の違犯者を出さず、五月十五日僕が満四十一年目の誕生日に於て、縣下第二の大多數、四千三百八十四點を以て當選を致し、再び衆議院に選舉區から送られ、他人と其選を異にし、憲法史に特筆すべき

事蹟を得られたのが、即ち少しも修飾のない僕の入信の前後でありました。信仰の趣味を解せざる人々は、僕の信仰を偶ま冷評する者もあれば、笑ふ者もありますが、僕は彼等無宗教者より冷評されるにつけ、彼等無信仰者より笑はるゝにつけ、自己の不完全にして修養の倍々足らざるを思つて、自ら責め眞摯に道を求めんと日夜慮て居るのです。嗚呼絶大なる哉佛の力。嗚呼不可思議なる哉佛の恵。

明治四十一年九月十九日亡父の第九週年忌當日
東京自宅に於て拜記す。

安心上の苦心より入信

笠木 輔 一

私は新潟縣下の一寒村に生れまして當年五十八歳になりました。幼少の時分には、祖母が非常に篤信家でありましたから、始終私の手をとつて佛壇へ連れて参り、如来様へ御参りを致せ、死ぬると佛様が極楽といふ結構な所へ連れて行つて、結構なる物を澤山下さるゝ」と始終言ひきかせて呉れました。夫ですから、私も小供ながらに夫が樂みて、始終祖母と共に内佛へ参り、念佛を稱へて居りました。

其後段々年をとるに従ひ、祖母は亡くなる、家事には縛ばられる、誠に勿體無い事であるか、佛様の事は全く忘れて仕舞ひました。其中両親は無くなり、廿九歳の時には大病に罹りました。此時は逆も助からぬと決心して、頻りに念佛を稱へましたが、何うも先が眞暗で安心が出来ませぬでした。然しながら全快すると共に、又後生の事は忘れて仕舞ひ、其後三十七歳の時に妻は亡くなる、續いて最愛の仲は盲目になるといふ惨々なる不幸に出遇ひました。夫でも猶ほ佛の御恩に氣が附かず、唯利欲の苦悶に迷ふて居つたのは、今日思へば實に慚愧に耐えませぬ。

其後、今より十七年前、倅に嫁を迎えて私は東京に出て、後妻を迎え、小賣商を初めました。處が今度は其日の生活に追はれて、猶更佛法の事は忘れて仕舞ひ、唯明け暮れ三毒の煩惱に狂つて居りました。爾るに佛陀は此の淺間しき私を見捨て給はず、今度は更に喘息といふ難病を與へて私を戒めて下

送母下高瀬作 頼山陽
小兒唯孩咲。何知是別離。大兒色帶慘。
阿婆來曷期。爺從娘不從。願得與爺偕。
何知送行者。亦有分際時。戒婢負兒去。
恐使母心悲。絮語致日暮。回首謝篙師。
小繫舊旗亭。喚魚姑勸扈。周旋已半歲。
店家皆相知。物々總傷別。不獨大小兒。

されました。之は後に思へば、全く佛陀が、まだ目が醒めぬかと私を呼び起して下されたのであります。私の喘息は毎年夏より殘暑にかけて起りますが、其苦しさは何とも申されませぬ。今息が絶えるか、之で死ぬるかと思ふ事も度々あります。其時祖母の事を思ひ出し、祖母が死ぬると言はれたが、自分は今死ぬるか、今死んだら何處へ行くだらう、と考へると未來は實に暗澹たるもので、起つても居ても、ちつとして居られ無い。今死んだら勿體ないが佛檀の内佛様に抱きついて居るより外に仕方が無いと悶えて居りました。

其中病が少し樂になりましたから、今の中に是非安心を得ねばならぬと思ひ、近所の老人に話しますと、近所に説教場があるから行つて聴けと教へられました。今迄近所に居ながら説教場の有る事さへ知らずに居たといふは、實に相濟まぬ事でありませぬ。併し行つて聴聞する毎に有り難くはあるが、何うも心の底に煩らはしき處があり、疑ひの心は此處彼處に起ります。併しながら不定の世の中と聞けば、捨て、は措かれず、あゝ誰か人があれば聴き度いと思ひましても聞く人がありませぬ。時々客僧に伺ひましても、一應すらくとしたお話はありますが、其已上は氣の毒で聞く事もならず。當時淺草の報恩寺の御老僧の御説教が一番私の胸に浸むやうに思ひましたから、彼の方の説教のある處へは、何處へでも参りました。けれどいくら聴いても、解りませぬ。此の不審を誰にか尋ね度いと思ひ、獨りて胸を痛めました。私の田舎杯には老人が集まつて、御相續といふ事を致しますが、東京にはそんな事も無く、唯一人で苦む計りてあります。其の不審といふは外でも無い、本願を眞受けにすれば助か

るといふ丈は解りましたが、其の眞受けにする味はひが解りませぬ。『御文』には「阿彌陀ほとけの御袖にひしとすがりまいらすももひをなして、後生をたすけたまへ」とたのみまうせ」とあるが、助け給へとなると自力になるといふ心配がありましたからです。併し唯有り難いと言つても、助け給へと頼まぬと、縁なき衆生は度し難いと言つても、どうしたものかと迷ふたのであります。いろ／＼の御方にきけば、皆それ相當のおさとしはありますが、私の胸には如何しても落ちませぬ。何う聞かしても私の胸が晴れませぬ。最後には、致方か無い、『正信偈』には「信樂愛持甚以難、難中之難無過斯」とある、又『御文』には「易往而無人」ともあれば、自分如き極悪人は到底助からぬのだと諦めました。併し助からぬと打遣りて置けば何時迄も御因縁の結べる時が無い。設ひ自力の念佛でも、念佛を稱へて居たら御因縁で安心を頂ける事も有らうと、唯無暗に念佛だけ稱へて居りました。

一昨三十九年であります。折角眞宗の流に生れ、御本山に参詣せずして死んでならぬ、御眞影様に拜禮を遂げたら、或は御因縁で御信心が頂けるかも知れぬと思ひ立ちまして、四月の六日唯一人で西京に向ひました。途中家康公の御廟のある久能山に参詣し、次の日は尾張の熱田神社に参拜して、どうか西京に参つて信心の頂けるやうにと、ひたすら心願を懸けました。固より眞宗に生れました故、家内繁昌や息災延命は祈りませぬが、唯信心を頂き度い計りてあります。夫から次の日江州の石山寺に参詣して、同じ様に信心致し、勢田に出て泊りますと、不思議にも茲て計らず田舎の舊知人に出遇つたのであります。別に打合せも何も爲ぬに、不意に宿屋で出遇

つたので、唯々不思議と申す外は有りませぬ。其人は夫婦連れて、御本山に御法事があるから参詣する途中であるといふ事でありました。初め隣座敷でありましたが、直ぐ聲で悟り飛び立つばかりに嬉しく、や、岡崎さん、久振て遇ひます」と言つて、私の方から訪ねますと、其人も非常に喜んで呉れまして、色々話をします中に、向ふから親切に「時に笠木さん、貴方は未来は何うか」と聞いて呉れました。「いや、夫に就いては自分も實に困りきつて居る處だ」と話しますと、「自分も喜ぶといふ程では無いが、如來の御恩を有り難く思つて居る、別に理屈をいふては無いが、御恩を忘れてはなりませぬ」と懇々と意見を述べて呉れました。「實は自分も京都に行つたら御信心が得られるかと思つて、遙る／＼やつて來た處だ」と申しましたと、「夫は丁度よい處だ、今御本山に法事も勤まつてある、一緒に参詣ませう」といふ事、私も非常に嬉しく、其夜は共に泊り、翌日は大津に出て、山科に参詣して彌々京都に這入りました。御法會に遇はう杯とは夢にも思ひませぬから、是ぞ不思議の御縁と、實に嬉しく堪まりませぬでした。

何分京都は初めてあるから、様子が少しも解りませぬ。其人達が先年來た人の懇意の宿が、西六條に在るとの事で、道を聞き／＼其方へ参りますと、東六條で御本山の傍を通りました。あゝ、勿体ない、御本山様の傍を通るのだと思ひまして、早速参詣する事に致し、御門を窺いた時の嬉しさは飛び立つ計り、何とも言ふ事が出来ませぬ。我知らず御影堂へ飛び込んで、御眞影様を拜みました時の心持は、何ともはやく、口にも言葉にも申様なく、唯難有くて、御眞影様の前に

心の曇が晴れませぬ。もう何とも仕様が無い、御開山様は叡山より六角堂へ百日の間参籠なされたと聞いて居る、御開山の御蹟を慕ふはまことに勿體無いが、最早や自力も他力も言うて居られぬ。唯助けたい計りになつて、先づ叡山に参詣し、夫より六角堂に参り、御開山様御靈驗の御尊像様、何うか私に信心を得させる様御引立を願ひますと、心に満腔の訴を捧げて、御堂の椽を九回廻はつて歸りました。歸りに胸をさすつて見ますに、矢張り疑ひが取れませぬ。

え、何うせ出かけた船だ、一つ九州四國兩西の靈佛靈社に参詣して、生命の限り祈つて見ようといふ氣になり、國の悴に相談しますと、國の悴も大賛成ぢや、若し病氣になつたら、何はさて措き飛んで行くから、序に朝鮮滿洲近く迄も行つて來たら何うかと言つて、早速に雜用を送つて呉れました。私も彌々之に力を得て再び巡拜の途に上る事に致し、先づ岡山より四國に渡り、金比羅様から善通寺へ出まして、大師様の八十八箇所に拜禮を遂げ、伊豫の松山より道後の温泉に立寄り、九州に渡りました。九州は先づ日向の天の磐戸に信心致し、上り／＼して神武天皇様の御靈蹟を始め、鶉鷄草葺不合尊の御跡等にも拜禮を致しました。神武天皇様の御靈蹟は、堂は小さくありますが、實に何とも言へぬ程有り難く、一生懸命に御願ひして、夫より薩摩に出て、熊本に参り、熊本では清正公のお宮に祈念を凝らし、今度は船で長崎に廻はりて、大宰府の天神様に参詣して、おなじく祈願を捧げ、小倉より福岡に向ひました。福岡の此方に日蓮上人の銅像が有りませぬ。茲でも一生懸命に信心致し、龜山天皇に御像にも拜禮を遂げ、又小倉では眞宗第一の寺に参詣して、文字關より馬關

感泣致しました。私は此時程嬉しかつた事は、まだ覚えませぬ。ア、知らずに來て法事にも會はせて貰ふた。定めて今度彌彈を御信心を獲させて下さる事か」と思ひますと、實に身も躍り上る程嬉しく思つたのであります。

夫から宿に着きますと、宿の主人は西御本山の世話方をし居られる非常な篤信家で、又々御縁を嬉しく喜びました。其夜熟考へますに、今度の事は皆佛が御手引き下されしに違ひ無い。今度こそ彌々御信心を頂く時節が至つたのかと思ひますと、自のづと勇氣が百倍して参ります。翌朝は宿の主人の案内で、朝三時に起して貰ひ、東御本山に参詣致し、朝事が済めば總會所で聴聞いたし、朝飯を喰べては又夕方迄参詣致しました。爾るに何うした事が難有味が昨日に較べて夫程で無い。何うも喜びが薄らいだやうに思へます。之では済まぬと思ひまして、色々努め、其後一週間の間毎日参詣致し説教聴聞しましたが、如何しても最初程充分でありませぬ。此の時には實に落力致しました。

もう此の上は仕方が無い、設ひ自力になつても、神佛の加護に預つて信心を頂くより外に道が無いと思ひまして、知人にも別れ、唯一人て高野山から伊勢の方に出かけました。伊勢は内宮外宮共に参詣しまして、御先祖の親様、何うか私に信心を得させて給はれと、石に嚙りついて心願を籠めました。夫より大和に出て奈良へ参り、叡傍の御陵へも参拝しました。あの邊は結構な寺が澤山有ります。設へ他宗でも構はぬ、自力も他力も總が／＼で私を助けて下さる様、處構はず到る處に祈願して、再び宇治より京都に歸りました。今度は何うかと御本山に参詣しました處が、矢張り同じく

に越え、馬關では安徳天皇の祠や清盛公の墓に詣りて、夫より山口縣に廻はりて、廣島に出ました。嚴島にお参りして力の限りお願ひ致し、吳より船で尾ノ道に上り、夫より三度目に京都に歸りました。

京都に來て宿に泊りますと、矢張り前と同じ心持で、何うも心の底の曇が晴れませぬ。今度こそは頂けるかと思つて居りましたが、皆な駄目でありました。此の時の心細さは、皆様の御察を願ひます。併し此位の苦勞は御開山様の御苦勞に比べると、兎の毛の端にも及ばぬと思ひ直して見ましても、心の底が鬱々として、何とも言へぬ苦痛が致します。仕方無い、自分如き極悪人は到底駄目だと諦めまして、獨り淋しく御眞影様にお暇乞致し、す／＼と東京へ歸つて参りました。此時も最初の時程の喜びになり度いと頻りに悶きました。遂に駄目でした。

然るに昨四十年七月中は、亡母の年回にも當り、且つ七八月中は毎年病氣がひどく出ますので、郷里新潟縣に歸りました。九月十日歸りに積りて居りますと、丁度拾一日より三日間柏崎の聞光寺で、近角先生の御講義があるといふ話でありませぬ。併し此は重に僧侶方の爲めのやうでありましたが、併し毎日一席丈け専福寺の方で御説教があるといふ噂でありました。手次寺の住職が言はれるには、今度東京より大講師が見えて三日間御説法がある。聞光寺の方は俗人が聞いても解らぬかもしれぬか、専福寺の方は誰が聞いても解るから、折角の事故是非聴いて行けと、勧められました。私も夫ならば一日二日の事は云ふて居られぬと思ひまして、歸京を一日延ばし、専福寺に参詣して居りますと、長岡よりお出になる途中に據

所なき依頼が有つて其處で急に御立寄になり、晝中は御出になり難いといふ知らせがありました。私も甚だ残念に思ひましたが御因縁が無つたものと諦め、他に道連が有りましたから、已むなく十二日朝柏崎より乗車歸京の事に決めました。

拾二日朝子供や近隣の者に送られ、柏崎にて乗車しますと其處へ先生と、生家の檀寺西方寺の住職が見えました。檀寺の住職が私の俸を呼んで、「親爺はもう歸るのか」と聞き「夫は残念だ。近角先生は之から朝の間に柏崎に御参拜になる處だか、柏崎より五里程隔つた處に柿崎と言つて、御開山聖人御流罪の靈蹟があります。夫は東京へ歸つたら、先生は此處に御出になるから是非伺つて御法話を聴聞せよ」と言つて、今發車といふ時に先生の御宿所を書いた紙片を呉られました。夫から二人は矢張り同じ列車に乗込まれたが、私は三等でありますからお話を伺ふ事は出来ませぬ。稍あつて貴師方は柿崎にお下りになりました。私は窓から窺ひて居りますと前をお通りになる時、先生は私に顔を向けて下さりました。私は有り難くて涙がこぼれました。今日思ひますと、今汽車が出るといふ危機一髪の處で、先生の御住所を聞かせて頂いた事杯、全く佛の御手引きに違ひありません。若も此の時聞かせて頂か無つたら、今も迷ふて居なければならなかつたのです。之を思ひますと、如何にも御手引の強いのが、有り難くてたまりませぬ。

夫から東京に歸りましたが、先生は暫くお歸りにならぬと聞きましたから、十一月より拜聴に出かけ、今春來は毎々御尼介になつて居りました。併し段々お話や御講話を聴聞致しますにつけ、有り難いは有り難いが、何うも眞心徹到とい

は此の白髪頭を頂いて、何時迄愚圖々々迷うて居るのか、何と何と因果な事であらう。併し自分の過去が悪いから故、何とも仕方が無いが、何うか早く信心を頂き度い。今にも死ぬる身の上で無いかと思ひますと、耻も何も構ふて居られ無い。他の御聴衆の御邪魔になる事も打忘れて、我知らず、先生に御伺ひ致しました。すると先生は懇々と御親切に御諭し下され一層有り難くは頂きましたが、何うもまだ本當の安心が出来ませぬ、併しいつ迄も皆様の御邪魔してもいかぬと思ひまして、其日は「解かりました」と申上げて下りました。

其後四月一日の日曜の事でありました。何時もの如く御講話も濟み、聴衆も半分以上お歸りになりました後で、私はいつても何處かで誰様か肝腎の處を話されぬかと、耳を澄まして後迄幾つて居りました。兼て御親昵にして頂いて居た九州の方に、「私は誰様か前後左右より尋ねになつても少しも動かぬといふ金剛堅固の御信心を頂き度いと思ひます。若し異安心とかに落ちては、億劫にも取反しのつかぬ一大事と思ひます」と、切なき私の心中を申述べました。すると其方か「一口二口お話し下されてある處へ、先生様は御他出の御仕度にて近寄り下され、まだ解りませぬか」とお聞き下されしました。すると九州の方が「此の方は金剛堅固の信心を得度いと言つて苦しんで居られるのです」と言つて下されました處が、先生が仰せ下されるには「まだ解りませぬか。時に越後の氣風とは少し違ふかも知れぬが、越前のさる處に一人の老婆が有つて、香樹院大講師の前に出て、尋ねせられた。其時大講師が仰せらるゝには、婆、お前の言ふ事は違ふぞと曰はれた。其時其老婆か申上げらるゝには、御尤て座ります。日本

ふ譯には参りませぬ。彌陀佛は我々有情を一子の如く憐念し給ふと承はり、又彌陀の願心は一切有情を悉く助けずば、措かぬとある廣大な御親心だと聴聞します時は、實に恐入りた次第であります。またどうしても心の底からの安心が出来ませぬ。私自身の愛子にしましても、幾か程意見しても聞かぬ時は、逆に懲す事が度々あります。然るに佛は此の十惡五逆の大罪人、實に仕様の無い私、未だに疑ひの晴れぬ者をば助けずは措かぬといふ廣大な親様である。其親様に對し何が疑ひであるかと、自分の胸を尋ねて見ますと、何といふ程の事も無いが、唯何となく自分と佛様との間に、除く事の出来ぬ障り隔りが有つて何うもはつきり致しませぬ。勿論諸方て色々御説教を聴聞しました御陰には、如何なる佛の御慈悲であるかは大底に解らせて貰つたやうにも思ひましたが、併し茲が大事の處がある。茲で自分の獨り決めに陥いては萬劫にも億劫にも取り反しのつかぬ一大事である。設ひ誰様に聞かれやうとも、右より突かれ、左より押されやうとも、乃至前後上下、何處から叩かれても、少しも動かぬ金剛堅固の御信心を頂かねばならぬ。何うか早くそいふ確かな信心を頂き度いといふのが、此時分の私の不斷の考でありましたが、何うしても旨く行きませぬ。

確か二月の末であつたと思ひます。いつもの如く御講話に伺ひますと、此の日は御講話の後に、皆様の御話が御座りました。私は能く存じませぬから、田舎の御相續のように思ひまして、其席に列なつて居りました。此時列座の方々を見ますと、何れも壯年の善男子善女人の方々ばかりで、皆様が非常にお喜びの様子、私は羨ましくして「たまりませぬ。自分

に三人と無い大講師様の仰なれば、彌々間違つてゐるに違ひがらみませぬ。爾るに此の間違ひだらけの婆めを、間違はず助け下される親様は何といふ廣大なる御恵みであるかと、彌々深く喜ばれた。すると此時大講師は、夫で宜布しいと仰せられたといふ話がある」と言つて聞かせて下さりました。すると此時此の先生の御一言が私の胸に徹しまして、(後に此の御一言は、大悲の親様か私の爲に先生をして斯く曰はしめ給ひたものである事に氣が附いて感泣いたしました) あゝ、有り難や、大悲の佛陀は此の間違へる私を御助け下さるお慈悲で有つたかと氣が就くなり、今迄の胸の障りも滞りも、露の朝日に消ゆるが如く、消えさり、其の難有さは何とも言ふ事が出来ませぬ。俄に空腹のやうな心地もしますし、肩の重荷を下したやうの心地も致し、身體中が皆軽ろろとなりました。「あゝ先生、分りました」。あゝ難有や。南無阿彌陀佛々々」と手を合はせ、嬉しさに泣けて何も言ふ事が出来ませぬ。御禮を申上る事さへ忘れて、家に歸りました。

家に歸つてからも、唯嬉しくてたまりませぬ。眞に歡喜踊躍の思ひてありました。私が斯く長い間苦しみましたのは、若し思ひ違ひや、聞き違ひがあるまいかと、案じたからであります。佛陀は如何なる大惡人でも、疑ひ晴るれば必ず助け下されるとは、早くより頂いて居ましたが、萬一思ひ違ひや聞き違ひ有つては一大事、理に合はぬ者は、佛と雖も助けなさるまい。若しや道理を間違へて聞きては居まいかと、恰も兩國橋を渡るに茲の金は腐つては居まいか、此の板は抜けは爲まいか、踏み違へてはならぬ、と力んで居つたも同じであります。爾るに、先生から「大講師様が老婆、お前は間違

へて居ると仰しやつた時、其の老婆が、此の間違ひの者を助
助け下さるゝ慈悲が有り難いと喜ばれた」と、唯一言承はる
なり、こゝろりと其のお話が、私の胸におちました。此方が間違
の凡夫なればこそ、佛様のお助けと喜ばれたと氣が就くなり、
長々の迷霧がからりと晴れました。もとゝ道理や理屈で行
く事の出来ぬ凡夫の身を以て、道理理屈を求めて居ましたの
は、丸て暗闇に居て道を探して居たのであります。お光明さ
へ仰げば、直ぐ通れるのに、自分で戸を立て、勝手に苦しん
て居ましたのであります。もとゝ自分が間違ひだらけの凡
夫である事を忘れて、何うか御慈悲を間違へぬように杯と思
ひましたは、何といふ不量見であつたか。自分の間違ひを棚へ
上げて、お慈悲に案じをつけて居たかと思ふと、唯々勿體な
くて恐入る計りてあります。私は彼の老婆は全く私の爲めに
教へを遺して置いて下された如く思はれ、嬉しくてゝたへ
られませぬ。

家に歸りますなり「今日は家内、一つ聞いて呉れ、今迄の
心配が皆な無くなつて仕舞うた、今日迄の苦味が皆消えて仕
舞うた。」と話し聞かせて、家内にも喜んで貰ひ、又小僧供を
も呼び寄せまして、今日はまことに目出度い日だから、俺が
一つ奮つてやるとして、小僧供にも祝つて貰ひました。私は今
迄御信心を頂くのは、自分の煩悶の根を絶やす事かと思つて
居ました。之は誠に申譯なき間違えてありました。今から思
ひますと、頭からは程心易き御信心が、何うしてこれ迄解ら
なかつたかと思ひます。實を申せば私は易往而無人の御文や
又『正信偈』には難中之難無過斯とあるから、迎も頂けまい
といふ念が先きに立ちて、其爲め非常に苦しんだのでありま

せられるは、私が目下の味ひかと存じ、實に楽しく思ひま
す。南無阿彌陀佛、々々々。

甲申孟冬。奉母西歸至竹原。詣先隴。
賦此言志。

頼山陽

迎母遊上國。送母歸故國。新舊話未了。
相將上先墳。累々高曾祖。展視塋域兮。
淳朴慕久遠。流澤庇子孫。吁余獨犯教。
汗漫阻故恩。回首幾寒食。不得關條蟻。
嗛伏謝吾罰。引賚倚母存。母拜兒又拜。
霜風衣帶掀。
甲申冬日。歸展有此作。書付喜六。
祝其道讀書種子也。
同
吾家昔日讀書山。紫翠依然窓几閒。
俛使京塵染鬢面。歸來却對舊孱顏。

す。自分の事を申上げますのも可笑しいが、四月一日といふ
日は、私に取つては初めて大悲の親の思し召しが、心の底に
届いて下された日であります。永く紀念日に致し度いと思
つて居ります。

其後暫くは日夜何とも言へぬ程有り難く喜ばせて頂きまし
たが、二ヶ月程経ちましたら、又喜びが薄らいだやうて、お
稱名も懈怠勝になりました。之は何うした事か、大悲の親様
に見放されたのか、と思ひまして、頻りにお稱名を唱へて
居りましたけれども、矢張り前程の難有味が出て來ませぬ。頻
りに「正信偈」や「求道雜誌」や、「秀存語録」や「歎異鈔」を拜
見致して居りますと、ふと「正信偈」の雲霧之下明無闇とい
ふお言葉に氣が就きました。おや、勿體ない、親様は煩惱の私
を照らして居て下されてあると思ひますと、又何とも言へぬ
程有り難くなりました。佛様のお心は無碍光と申しますが私
は眞に何處迄私の心を見抜いて居て下されるのかと思ひ、感
涙に咽んだ事も屢あります。すると又御恩を忘すれる時があ
りますが、又思ひ反してはあゝ勿體無いと喜ばせて頂きます。
兎に角一度御恵みに照されてからは、設へ喜びが薄くなつて
も、もだく心がすつきり無くなつて仕舞ひました。時には小
半日も稱名の出ませぬ時もありますが、又勿體無いと氣就い
ては有り難く稱へさせて頂きて居ります。又「歎異鈔」の中
の「煩惱なきやらんとあやしく候ひなまし」といふ御文を思ひ
出しては、何たる廣大なる御慈悲であるかと思ひ、懺悔の下か
らお恵を喜ばせて頂きます。先生が常の御言葉に「一旦信仰
の門に這入つた者は、出たり這入つたりする事無い」と仰

嘆咏

秋となりぬ

三井甲之

日ぐらしの聲きけば
高き空、野もせ八束穂
秋の野のすがしさ思ふ。
こぼろぎの聲きけば
消ゆるものみなうつくしき
とはの光のかゞやししぬぶ。

沈みゆく外面のかけに
みなぎる力底ひにぞ
たぎるひゞきを、木の葉落ち
空しき谷にさく如く
夜寒のともし身にしみて
おほきなきけをしぬぶかな。

秋の空澄むに醒めくる胸門につくく〜と我れを願みるかな

風さやぐ槐の空を打仰ぎかぎりなき星の齡をぞ思ふ

千五百秋の秋の千種の咲き返り遠く遙けく猶や咲くらん

ゆく雲の雲間の星のまた〜きを待たず消えゆく現身の世や

秋の空の物悲しきに願みて虚假を抱ける心悔しも

天地のなしのまに〜鳴く虫や咲く百草や彌陀を知るらん

今更に物は思はず片よりに聖人仰かむ物は思はず

うつせみの八十國原の夜の上に光乏しく月傾きぬ

世の中に光も立てず星屑の落ちては消ゆるあは小星屑

まなかひに見えて消ゆともものが光り立て、消えなば悔はあらめや

秋風雜吟

在米 配 哉

海遠く日出てぬ露の原行けば

花そばの山に斜めや天の川

毛見衆の一行雁を見送りぬ

早稻晚稻雁金盡を渡りけり

秋風も關所の跡のすゝきかな

洗らはれてある墓を吹く秋の風

落日や秋風見ゆる海的面

黍越へて夜目はるかなる花火哉

昔知る友來り忽ち去る

相逢ふて別る、秋の男かな

死悲し七草にそゝぐ我が涙

時報

北海道傳道

八月十二日の夜、雨蕭々たるの裡、第三夏期傳道として東北海道に向て出立す、第一第二期の傳道一月半の疲勞身に餘りて前途凡そ四十日の傳道日程、寧日なからんとす、いつになきしめやかなる出立なり、唯仰ぐ所は大慈の冥祐、樂む所は各地御同朋の待受けたまふ心なりけり、

此行學舎の葛原運次郎君歸國の途同伴す、上野停車場に至れば境野君來る、曰く小樽の講習會にゆくなりと、予亦曰く、予亦同じく小樽講習會にゆくなりと、相語りて初めて小樽に量徳寺講習會と上官教會講習會とあるを詳にするを得たり、予は前者の招によりて今回北海道傳道の機縁熟するを得たり、而して境野君は後者の招に應じて行くなんめり、互に其奇遇を喜び、他郷友あるを豫め祝す。

雨中親切に見送りたまへる丸茂氏及び學舎諸君とプラットホームに別を告げ、座につくや全身の疲勞に襲はれて忽に睡に落つ、雨聲窓を撲ち、冷氣身に迫る、翌十三日午前九時花巻に下車す、同地同朋諸氏の迎を受け、宮澤直治氏宅に着し、宮澤政治郎氏、高橋勘太郎氏梅津氏有縁の人々と會談、慈光室に滿つ、晝夜二回、寺に於て講話す、集へる人々は多

くは是れ六年已前大澤講習會に於ける結縁の御同朋、當年を回想して大悲恩寵の甚深を感謝したてまつる、一日の法緣身の疲勞忽ち去りて歡喜稱名の間に十四日朝北海道出立に向ふ、

盛岡以北、古奥州の風光、物淋しげなる處愛すべし、青森に葛原君と別る、君は弘前に歸寧して半年ぶりに父母妻子と和樂團樂の間に半月の夏を消さんが爲也、同君に阜頭に送られて花巻より同行せる服部氏と共に連絡船田村丸に乘し夜十一時函館に着し、燈下求道前號の社説を草し、翌十五日朝出立、晚小樽着量徳寺住職岡崎元雄氏初め有志諸氏に迎へられ、奥の間に導かる、席を清め、香を燻き、盆裁涼を送り、燈影籠を隔つ、心初めて閑にして身亦胖なり覺えず、合掌して、恩徳を感謝したてまつる、燈を剔て書を裁す、當時の様子を回想するに足る、曰く、

拜啓今朝函館の宿に目覺め、一沐心地よく佛恩を感謝して、氣も爽かに出立仕候。開けたといふても、北海道の風物は大地に内地と異なるもの有之候。即ち外一面秋草咲き出て、恰も輕井澤の如く、紫黄白赤、實にくさくの草花、何とも言へぬ、清らかなる眺めに御中候。大澤とか言ふ澤の中には小嶋嶽散在する様、北海道の松島とか云ふも、そは一向感服不致、却て北海道の平凡なる到る處、靜々たる樹木(勿論鐵道附近は小なるも)天然の儼なるナガメ、何とやら天然に對する新らしき、崇高なる感を得申候。況んや天空一碧の海洋と連るに於てなや。

函館より小樽までは、鐵道のかゝる事後れたる爲め、今に開墾出來ざる土地多く、實に近頃なき、旅行の趣味を感じ申候。其開拓の方はたるや。先づ樹木を燒き、其根は其儘にして、自然に朽らしめ、漸次畑にするものに候。

先年来國ロツキー山を横切りし時、數千尺の老樹の深林を燒きてありしに比すれば、何にも小規模なれど、トニカク、近來になき、面白味に候。特に秋草の野趣と、夏木立の鬱々たるとは、何とかして、東京の人に、一目見せ度存じ候。

アマリ心閑にして窓外に對して、佛恩を感謝致居候へば、何となく、淨土を觀する心地致し、善壽の疏を拜見致し候。昨日津輕海峡を渡る時も、當年横濱出帆の時を回想任候。而して時正に夕陽日没せんとして形、鼓を懸くるか如く日想觀の面影を致候。サレド、何分にも今日、夕方六時半迄、十二時間の事なれば、或は眠り或は覺め、同様の風景を送迎しつゝ遂に小樽に到着致候。

花巻巴來、服部といふ人同伴致し與れ申候。小樽には、最徳寺岡崎氏を初め寺内一同、麻里傳之助君も、眞大の島君も、出迎ひくれ申候。麻里君とは十數年ぶりの久瀧を談じ候。

今や小樽は有形に無形に多忙に候。上宮教會の講習會は本日より境野君はじめ、又た別に今日より靈照大和上の説法あり、近々島地老上人の來演説あり、又た村野尼公の御下向あり、況んや十一日より水産共進會は全道の人氣を集め、イルミネーションやら、音楽やら、狂せんばかり、而して本日不肖の同じ列車にて、浪花節奈長丸の乗込み來るあり。亦奇態なる小樽なる哉。

而して此間に處して、而も最もニギヤカナ、午後七時より九時迄、不肖の講義をなす。坐禪せば四條五條の橋の上とか申事有之候。此紅塵俗埃中にありて、歎異鈔と十七靈法とを講じ奉らむとす。是亦煩惱炎中の一服の清涼劑ならむか。近時東京博覽會すら、都門を去りたる予が、此熱鬧中に投じ來るも何かの因縁なるべし。正に是れ北海道の法田は佛種を播くの御因縁なり。佛天の御はからひなりと氣付き來れば、一層森嚴の氣胸に充つるものあり。明日よりは亦如來三昧中に入りて、神聖なる講義を開かん。

冀くば北海道民の心田を開拓して、有縁の衆生をして如來の光を仰がしめたまはんことを。南無阿彌陀佛。(八月十五日 於最徳寺)

十六日より二十二日に至る一週間最徳寺に於て毎夜講話す、果して眞面目なる信仰氣風勃興するに至れり、此の如き共進會の狂奔中にも拘はらず、夜毎に直摯の求道者を増し、從來理論を喜びて研究的態度をとりたるもの、人生問題に目

覺めて、實驗の信仰を味ふに至れり、蓋し小樽は奮闘生活の甚しき所、無意識に信仰を求めつゝ自覺せざりしもの、將來必ず大に信仰の起るべき運に當れり、晝間には手宮に於て演說會及婦人會を催ふふし、又最徳寺に於て同上、又圓融會主催にかゝる島地老師及び境野君と共に公會演説を爲す。

西館謹爾君は寺の姻戚にして遠くより來聽せらる、又麻里傳之助君は予か竹馬の友小學校時代の同學也、三十年ぶりに久瀧を叙す、同家に拘かれて懇切の饗を享く、

二十三日四日札幌に移る、齋藤弘輔氏及び母堂夫人たい子并に令嬢出迎はる、山鼻別院にて開會三牧管事主任たり、夜は三條説教場にて開會、同地は基督教も盛なる地にて、人皆信仰問題に耳を鋭くして聴く、二日間の傳道、結縁頗る多かり

き、又齋藤藤藥輔にて家庭講話を開き、全家法縁圓熟せしは蓋し宿善尊家と謂つべし、舊友清川圓誠兄、北海女學校の經營に盡瘁せらる、相遇ふて久瀧を叙す、大伴志勇松崎覺淳松浦抱月等の同朋諸君に遇ふ、法喜限りなし

二十五日六日岩見澤明了寺に於て開會、嘗て新法臺二たび留錫したまひし寺、慕懷禁しがたし、三十二年火災後四十日間の本堂を新築して以て臺下を迎ひ奉りしといふ、住職藤波現道氏之に移住せし時は全く深林たりしが、今や北海道四通八達之地、將來大に發達の希望多し、晝間は近郷の老若男女郡集し、夜間は青年求道者のみを以て満たさる。

正午船青森に着す、當時の消息に曰く

北海道を終りて、昨日青森に渡る、藤井君等の迎を受け蓮心寺に參申候。忝くも 明治天皇陛下の御行在所に於てられたること再度、于今 玉座、御床神聖にして靈氣動く寒僧何等の幸か其隣房に宿るの餘澤を蒙る、況んや青森已後、弘前、秋田、山形皆此度 皇太子殿下御行拜の御道筋たるに於てをや、草莽之微臣、布衣之寒僧、ゆくゆくつゝしみて 聖德皇太子の十七靈法を講じたてまつりて、心私かに明治時代に於ける 聖德皇太子の御洪摸を仰きたてまつる微衷に御座候。當地の人情敦樸、人皆滿腹にして心渥し。信念亦將來大に起、敬虔なるものあらむ。昨日は後二席之講話、人皆しみじみと、靜聽感動、共に佛恩を喜び申候。今朝齋戒沐浴、佛前に詣せしに 聖德皇太子の虚像在せり、つゝしみて、聖德讚にて勤行仕候。小野君來訪、昨夜共に散歩して當所名物買求候間フキのステツキと共に同君に托し申候。

此頃はあまりに佛恩の洪大無盡なるに感泣仕候。冀くば百家民人の皆佛恩に浴して以て此天恩無窮の光輝を世界に光被せしむる氣運あれかしと念じ居申候。皆々様、學舎一同御恩を喜びなさるべく候。南無阿彌陀佛

已下東北傳道は次號に譲る

二十七日八日は栗林常照寺にて開會、これ石狩原野中に開墾せる越中蠣波村堂宇巍然として田園の間に秀づ、參詣の群集、宛然として北國に在るの感をなましむ 馬を以て往復す、移住民の疾苦を想ふて其信念の渥きに感す、

二十九日三十日は旭川支院及び常文に於て開會、旭川は新開の市街、活氣縱橫將來の勃興必ず大ならむ、常文は一望の田園美はしきこと限なし其人情の質樸なると共に其開拓の功蹟を想ふ、感謝欄の所感此處に於て起る。

三十日旭川より直行函館に向ふ、小樽にて車窓岡崎麻里諸氏の親切なる見舞を受け九月一日朝函館に着す、一日二日晝夜大谷派別院に於て三日本派別院に於て開會、何れも異數の待受を蒙り、渥き歡待を享け感謝言なし、函館は青年の信念既に勃興して、大谷派に懇話會、本派に函館求道會を組織し、有爲の青年有力の紳士皆熱心に信仰を求む、昨午大火後たるにも拘はらず、元氣既に回復し、少しも撓める氣色なきは亦勢力の充實を知るべし、本派輪番名和淵海氏等以て其信仰上大に待受たまひ諸氏寺、内一同及び求道會員同朋諸氏懇切なる晩餐會を開かれ感謝極まりなし、大谷派輪番青宮慈照氏學友たり、谷氏我同國人たり、兩氏及び寺内一同及び懇話會諸氏は親密なる送別會を開かれ、別院にて布教中の平松理英師と共に出席し、翌四日諸氏の見送りを受け、二十日間北海道に於ける佛陀の深き冥祐と御同朋の温き懇情を感謝しつゝ、再び田村九甲板上北海の山水に告別し名口

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、皆嚴格なる眞行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なきもの、社會實務の人生問題の解決に辛酸を嘗めざるは、其理想を實現せむが爲に、奮然として志操清浄なるものを其理想を實現せ仰るは未だ嘗て見ざる所也。此の必要に應じんとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道會館を設け、此等の人々と共に心を潜めて、信仰の問題を講じ、互に心霊の修養に實踐躬行に勉め、また一方には、日曜講演を開き、其の修養に人々と共に心を潜めて、信仰の問題を講じ、互に心霊の修養に充て、居間は、常に満員にして、求道の人々を容れ、其の修養に實なる先輩の指導より、漸次其結果を擧げむことは、實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設けなく、其不便を感ずる事一日の事にあらざる所以の、蓋し其規模大にして、完全なる會館の建設を企圖して、佛敎者一般の需要に充て、且つ清潔なる社會の中心に設け、此等佛敎の如き若し燎原の手に成らむ事を、詳細調査し、來りて、本會館建設の如き若し燎原の手に成らむ事を、望むに切也。本會館建設の如き若し燎原の手に成らむ事を、察せられ、協力贊助し、玉はらむことを謹んで白す。

明治三十六年十月

發起者 近角常觀

求道會館設立喜捨金

受領報告(第三十六回)

- 一金貳圓也 大分 佐藤正雄殿
 - 一金壹圓也 北海道 飯田初一郎殿
 - 一金貳圓也 高松 知 謹爾殿
 - 一金貳圓也 函館 西館 謹爾殿
 - 一金參圓也 愛知 長谷部 とも子殿
 - 一金五圓也 花卷 宮澤政次郎殿
 - 一金拾圓也 札幌 齋藤弘輔殿
 - 一金拾圓也 函館 熊谷由太郎殿
 - 一金貳圓也 山形 阿部 孫七殿
 - 一金五圓也 若松 和泉鐵次郎殿
 - 一金貳圓也 東京 綱島 政治殿
 - 一金拾圓也 在米 堀内文次郎殿
- 小計 金五十四圓拾錢也

通計三千參拾七圓五拾四錢也

右御寄附を忝うし有難奉存候 茲に謹みて奉感謝候也

清澤滿之師序 近角常觀著

(拾月廿日發行の豫定)

訂正 增補 信仰之餘瀝

第拾版 改正定價 一冊金卅錢 郵稅四錢

久しく品切なりし本書は、彌々今回大訂正大増補、根本的改善を加へて信友諸君に見え奉らんとす。其主要なるものは左の如し。

内容の増加

著者は本書の完全を期する爲め、新に増補する處六章、殊に著者自身が爾後の信仰經過を告白し、如來の加威力を感謝せんが爲に、附録として「予が信仰的實驗」の一篇を増加したり。

改版訂正

本書は既に九版を重ね、發行部數一萬以上に達し、版毎に訂正を爲せりと雖も、猶ほ遺憾の點尠からざるを以て、今回は全部を組み直して著者自ら誤植訂正は成る可く華美輕薄をさけ、質素堅實を旨とし、初版の體裁を維持するに努めたり。

製本體裁

斯の如くにして本書は、其内容に於て、其の外形に於て、根本的に面目を一新するに至れり、若し夫れ本書の價值如何に至りては、著者近角が入信臂頭に於る告白感謝の結晶として、既に諸君の知り給ふ處、願くは我が同胞諸君、一讀再讀の榮を給ひて、如來救濟の大事實に着目し給はん事を謹みて白す。

代金既送ノ諸君ニ謹告

前記訂正改版の爲め改正定價金卅錢郵稅四錢と致し候。就きては從來拾五錢定價にて御申込の諸君は、本書御落手と同時に、不足代金早速に御送附願上候也。

發行所 東京 東區 本町一丁目 森六番地 發行所

南條博士 序
柏原祐義 編
禿義峰

香樹院語録

吾國所謂師範は他方の體現者な、眞宗教の先達たり泣くものな思ひ眠れぬものな醒れ給ふ力の顯現なり力なり化なり。かくる諸師が御自身の自著娘を、御門手の手記録や諸國信者の談片身によりて其の精と髓とを記録したるものな本誌とす。されば本書は、諸師の可行情録也是を讀まば信仰より流露する感として暖かなる人格に接し、以て慰安と覺醒とを與へられむ。

恩寵の宗教 著 多田鼎

金 卅 三 錢
郵 稅 二 錢

最新刊

親鸞の信仰

文學士 近角常觀 著

クロイヌ綴美本
金七十錢 小包八錢

親鸞聖人の信仰は他力信念の極致で末世を照す唯一の先である。本書は近角先生が同一信念に依りて直に聖人の全精神に接觸せられたる。實驗の告白である。死後が恐しい人、罪惡に戦く、病苦に沈む人、人生の無意義をかこつ人、生活に苦む人々は、いかにしても本書を讀まねばなりません。

人生の行路

人格は力である光である人格の完成は是非共修養にまたねばならぬ人生はこの修養によりて意味あるものとなるのである本書は村上先生が多年の蘊蓄を傾注して是個の問題を痛切に解釋し決判せられたる結構な書物でありま

東京 巢 五 無我山房 振替 口座 二二二

毎月一回一日發行
拾月一日九號發行
第一卷

アカネ

第九號
價一冊十五錢郵稅一錢
六冊稅共九十錢

本誌は正岡子規竹の里人の遺業を繼ぎ短歌の研究を中心とし、俳句其他一般の文藝及歐洲文藝の研究に従事し、日本文學の精髓を發揮し眞個の日本文學建設の理想に向はむとす、吾人は自然科學及宗教の前途を考へ現代日本の文藝が如何なる使命を帯ぶるものなるかを思ふが故に時代思潮及實世間生活に對し眞摯なる批評をなさんとす、

小説 蚊帳 廣瀬青波作

小説 村の娘(ポルゲル) 廣瀬青波作

詩歌製作の衝動 三井甲之

俳句の情調 大須賀乙字

和歌入門 三井甲之

大伴旅人の生活と作歌 山之

評論 夢よりさめて(長詩) 甲 蛇 床
森の衰(長詩) 甲 蛇 床
其他俳句和歌長詩等の韻文二十五頁に及ぶ
● 每號和歌俳句長詩文章を募る

東京 本郷區 駒込 子力ア發行所 千駄木 町十五番地
大賣捌所 東京 堂 上田屋 監 春堂 服部書店 雲閣

宗教道光

(行發日八回一月前)

定價一部
金 貳錢
郵稅五厘
前金に限る

第壹卷第六號目次 (九月八日發行)

- 現時の社會
- 信樂の源泉
- 道友のたより

- ソローの「ワルデン」を讀む
- たよれ佛に (少年唱歌)

- 念佛の深義
- 兒童の宗教思想
- 日曜學校の材料

- 佛は光明なり
- 佛は無量壽なり
- 佛は慈父母なり

- 子供ごころ

其他無邪氣なる意味深き小話種々

發行所

京都市西中筋
魚棚下る

京都求道會

近角著作目錄

信仰問題

第 定價 五十五錢
版 郵稅 八錢

人生と信仰

初 定價 貳拾錢
版 郵稅 二錢

以上二書近刊之豫定

懺悔錄

第 定價 貳拾錢
版 郵稅 二錢

此書は著者が平生手を離さざる親鸞聖人の歎異鈔の眞髓を、自己の實驗をはじめ、王舎城の悲劇等の人生の事實の上より何人にも解かりやすく説示したるものにて、本書を讀みて忽然として入信せる人少からず

冠 歎異鈔

再 一冊 郵稅 共七錢
版 (定價 五錢 郵稅 二錢)
但し三冊までは郵稅 貳錢
五十部以上二割引

此歎異鈔は心を込めて出版したるものにて、讀み易き様に字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參考すべき文を引照して親切に作りたるもの也。

發行所 京都市本郷區森川町一 求道發行所
振替口座 壹六六九六番

急 告

近角常觀著

信仰之餘瀝要略

定價金五錢 郵稅金貳錢 (但し三冊迄は郵稅貳錢) 五十部以上二割引

右は今回さる御方の御依囑により「信仰之餘瀝」中の眼目、宗教的同朋、信界に於ける監獄、以下數章を拔萃し、施本用小冊子として印刷刊行の豫定に候、就ては他に御同志の諸君も有之候はゞ、印刷部數等の都合も有之候に付、早速御入用の部數御申込被下度く、傳道用施本としては確に適當の者ならんと相信じ候也

求道發行所

本所事今般振替貯金口座に加入仕り候に付ては、爾後本所宛御送金は總て振替口座御利用願上候也

口座番號 第壹六六九六番

但し 登記料金二錢必ず御加算の事

求道發行所

規 定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	一六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

● 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十一年八月廿八日印刷
明治四十一年九月一日發行

發行所 求道發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
(振替口座 一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

前號要目

求道

◎人生唯如來を信ぜよ

◎他力信仰の淵源

一 佛教と念佛(上)

感謝

◎高松講習會◎鹽飽島◎極樂寺講話◎明

石神戸

講話

◎光明名號の因縁(「執持鈔」講義の二)

近角常觀

第四章
第五章

告白

◎智眼開しと悲む勿れ

小笹熊谷

講義

◎歎異鈔——第九章

近角常觀

歎歌

◎秋思(長詩)

増田八風

◎五月雨(知歌)

増田八風

時報

◎大日本佛教青年會夏期講習會◎第二夏

期傳道◎第三夏期傳道